



# 十六夜の占術師

橋本昂祈



Akinori  
Hashimoto



# 目次

1	1
2	3
3	7
4	13
5	17
6	20
7	23
8	28
9	30
10	35
11	41
12	48
13	54
14	57
15	62



# 1

大田区蒲田の雑居ビル6階に橋本章(アキラ)はいた。チャイニーズエステの薄暗い一室には、アロマの薫りが漂い、アキラは裸にバスタオルを巻いた状態でタバコを吹かしていた。

「お客さんはじめて？」

ジャスミン茶をアキラに手渡してリエはいった。

「いや、半年に一回は来ている。リエちゃんとははじめましてだけど、いつからこの店に  
いるの？」

「最近、この店入った。前は、蒲田の違う店いた。ここのママさんととてもいいひと。あなた  
ここから近くに住んでる？」

リエはアキラに肩を寄せながらいう。ショートヘアの髪の毛からフランキンセンスと  
ホワイトセージをミックスさせたような甘くてスパイシーな台湾製オイルの薫りがした。

「徒歩で15分くらいかな。リエちゃんはどこに住んでるの？」

黒いタイトなチャイナ服の隙間から見えるリエの胸を撫でながらアキラはいう。リエ  
は少しうっとりとした表情でアキラの股間に視線を移した。色気を感じているようだ。

「鶯谷よ。友達と住んでる。けど、私、仕事忙しいね。ほとんどお店泊まってる」

鶯谷は蒲田から京浜都北線で一本で行ける。都内でも有数の風俗街がある上野の次の駅  
のため、デリバリーヘルスやソープランドに従事する女が多い。それでも、電車で30  
分以上かかるお店で働いているということは、地元で顔を知られたくない心理が働いて  
いるのだろう。

「鶯谷かぁ。上野の隣町だけど、降りたことはないな。うちはお墓が浅草にあるから、上  
野で降りて歩いて浅草までがちょうどよい運動だよ」

「お墓が浅草にある。古くからある家ね。金持ちね」

タオルが巻かれたアキラの股間のあたりをリエの手がまさぐりだす。中国人女は金や  
権威にめっぽう弱い。アキラの家は旧家ではあるものの決して金持ちといえるような家  
柄ではない。しかしながら、アキラの母親は沖縄では有名な資産家の娘なので、沖縄に帰  
省するたびに叔父さんやおばさんから十数万円のお小遣いを貰っている。その金のほと  
んどは小説家になる為に人と違う学びに投資されている。占いも風俗遊びもその一部だ。

「お客さん。うつ伏せ。マッサージするね」

リエはアキラの腰に巻かれたバスタオルを剥いだ。アキラがシングルの布団へとダイブ  
する。リエは足の裏から優しくマッサージをする。店内はヒーリングミュージックが流  
れていて、隣の部屋からはパンパンという音が密かに聞こえてくる。俗にいう本番店だ。

ただ、アキラは追加料金なしでリエとセックスできるとしてもそのような気分にはなれなかった。

「オニイサン。今日休み？」

リエはアキラのふくらはぎから大腿筋を揉みほぐしながら尋ねる。

「休みと言えば休みだし、仕事といえば仕事」

「お仕事何してるね」

「占い師やっているよ。あと、副業で小説を書いている」

「小説家なの？ オニイサン頭いいね。あと、占いもできるの？」

リエはおもむろにアキラの顔のそばに来て手相をみせた。

「わたしの手相どうなっている？」

うつ伏せから半身になったアキラはリエの手相を観る。なんてことはない平凡な手相だった。

「人に優しい手相をしているよ。誰かの役に立ちたいという気持ちが強い人だから、マッサージのお仕事は天職かもしれない。後は、太陽線という人気運を司る線がでているから、このお店でも人気セラピストの上位に入れる素質をもっているよ」

アキラが褒めちぎると、リエはアキラの横に寝転がり、ペニスを触り始めた。

アキラはリエの髪の毛を撫でて、目と目が合うと、リエはオニイさんよく見るとかっこいいね、と言った。そのまま耳元で、『ウオーアイニー』とアキラが囁くと、リエの黒い下着の上から手で愛撫した。ゆっくり優しく、時に激しく、リエの性感帯を刺激していくと、そのまま下着の中に手を突っ込んで濡れていることを確認する。

「オニイサン。頭良くてかっこいいね。少しだけいれていいよ」

リエは自ら下着を脱ぐとアキラのペニスを優しく掴み、中へと誘導していった。

## 2

アキラはシャワーを浴びている間、ほんの少し罪悪感が走った。ローションで濡れた自分のアソコをボディソープで落とす。初めましての関係で肉体関係を持ってしまった。店では自由恋愛とはいえ、アキラには可愛い彼女がいる。友達の付き合いとはいえ、なぜこんな店に来てしまったのだろうか。蒲田で飲む酒は高くつく。彼女である詩音のことを思い出しては、今日はなんて最悪の日だったのだろうか、と懺悔の気持ちでいっぱいだ。

シャワー室をでると、おつかれさまと言ってリエが身体を拭いてくれた。特に、股間をタオルで拭くときにリエは気持ちよかったね、と言ってアキラにキスをねだった。

「オニイサン、お茶飲む？」

「ああ。冷たいお茶でお願いしますよ」

アキラはスマホを取り出して、リエとの相性を調べることにした。1983年6月12日、マヤ暦で言えば、神秘K I Nと言われる恋人や夫婦に多い最高の相性だ。商売女だから年齢を詐称しているとも考えられたが、わざわざ自分の方からセックスに誘っておいて嘘を言う必要はないようにも感じられた。リエは特別目を惹く美人というわけではないが、熟女特有の色気を感じる。

リエはお茶を持って部屋に戻ってきた。お茶をアキラに手渡すと、タバコ吸う？ と尋ねてきたので、陶器の灰皿を受け取り、メビウス6ミリのロングに火をつけた。

「リエちゃんは、マヤ暦という占い知ってる？」

「占いのことはあまり詳しくないね」

「簡単に言えば、リエちゃんと僕は占いで相性が最高と出る。四柱推命というよく当たる占いでは、リエちゃんは辛(かのと)() といって宝石のように華やかなタイプだといえる」()

「私、宝石大好き。うれしい。あなたは何歳？」

「今年で42歳になるよ。リエちゃんは今年で39歳か」

「もうおばさんの年齢ね。だけど、いつまでも若くありたい。だからジム通ってる」

アキラは手にしたスマホからラインのQRコードを開いて

「ライン、交換しよ」とリエに促した。リエは迷うことなくスマホでそれを読み取り、「またお店来てね」といった。

店を出ると、友人の竹田が待っていた。竹田はアキラの中学からの同級生で建築業を営んでいる。夏真っ盛りだというのに、サーフ系のロングTシャツにジーパンという蒲田ならではの格好をしている。建築会社の社長とは名ばかりで、実際には従業員が2名ほどに、家族を役員にしてどうにか株式会社という体裁を保っているが、実際には数千万円の借金の連帯保証人となっている。

6階からエレベーターに降りる時、お互いになんかどうだった？ と感想を述べあった。

「俺の方はババァでさ。一気に酔いが覚めた。アキラは？」

竹田は先祖代々、肉体労働で生計を立てていたためか口が悪い。アキラとは不思議なご縁で、共に建築のお仕事をしてきた共通点があるので、占いの仕事がない時は竹田の会社で現場作業をさせて貰っていた。

「俺の方は、なかなか良かったよ。やっぱり、若い女よりも40近い女の方が気立てが良いし、一夜妻には最高だよ」

「ヤツた？」

「そんなん初回からできる訳ねえだろ」

アキラは嘘をついた。竹田はクールで口が固いように見えるが、陰では同級生たちにベラベラと秘密を喋る男だからだ。

「ここから、アキラの家近いだろ？」

「まあ15分ちょいくらいかな」

「コンビニで酒でも買って飲みなおそうぜ」

竹田は自転車を駅前に置いたまま、アキラの後についてきた。いつもだったら、ことが終わればすぐ帰るはずの男が、今日に限っては飲みなおそうというので悩みでもあるのか、とアキラは思った。

JR蒲田駅西口から京急蒲田駅まではけっこう距離がある。若者の足だったら15分で着くが、それはあくまでも道が空いているという前提である。羽田空港線への乗り換えが不便だということで、2つの駅を結ぶ、蒲蒲線が水面下で現実化しそうな話を鉄道オタクの友人から聞いた。京急蒲田駅近くに住むアキラとしてはどうでも良い話ではあるが、東急多摩川線ユーザーからしてみたら、ぜひ叶えて欲しい夢だったかもしれないのだ。

蒲田八幡宮まで来ると向かいにはコンビニがある。竹田はビールにつまみをかごの中へ放り込み、アキラは酒に強くないので、アルコール度数5パーセントのレモンサワー350ミリを一本だけ買った。

5階建てのボロいアパート。いちおう鉄筋コンクリートの仕様になっているが築50年も経っていて、階段はさび付いたまま放置されている。歩くたびにギシギシと音がするので、ゆっくり歩くようにと竹田にいう。

4階まで登り、部屋の前までたどり着くと、鉄の扉のメッキがかなり剥がれていて、とてもじゃないけれど、女を連れ込むのは難しいと感じている。

竹田を部屋へ招き入れると、アキラはすぐさま冷房を入れて、声をかき消すために、テレビの電源をいれた。

「まあ、お疲れ」

竹田はレモンサワーを手渡す。アキラは礼をいい、つまみのポテトチップスと枝豆をパーティ開きにしてから、缶のふたを開けて乾杯といった。

「彼女、もう付き合って何年だ？」

「詩音のことか。かれこれ7年になるかなあ」

「結婚はしないのか？」

「結婚はしたいけど、色々あって今はダメだ。」



「仕事うまく行ってねえもんな」

「まあ、コロナがあって対面での鑑定がほぼなくなったからな」

「インターネット店だから関係ねえんじゃないの？」

「うちは占ってよりパワーストーン販売の利益がでかいんだ。インターネットでの売り上げの方が高かったけど、所詮はリアルで金持ちにご縁しないと、パワーストーンの単価も低くなって利益が減る。薄利多売ではインセンティブもつかなくて、一人食ってのが精いっぱいだよ」

「まあ人生いろいろだな」

竹田は鬱憤(うっぶん)を晴らすようにビールを豪快に飲んだ。

「ところで、竹の方はどうなんだ？ いい人いないのか？」

「馬鹿か。女がいたら風俗なんて行ってねえよ」

「まあ、職業柄出会いも少ないしな」

アキラは枝豆を口にしてからレモンサワーで流し込んだ。

「ところで、いつまでうちのバイトこれるんだ？」

「今の現場、8月末くらいまではあるんだろ？ 8月27日が俺の誕生日なんだけど、その日までは稼がせてくれ」

「解った」

「でも、迷惑だったら他にいくらでも仕事あるから大丈夫だ。他の従業員からは嫌われているみたいだしな」

アキラは視線を落として愚痴を漏らした。

「気のせいだよ。他の職人もアキラが来てくれて助かるって言ってるぞ」

「そうかな。足場はやったことないから足でまといになってると思うぞ」

「いや、現場作業やってた経験があるから、動きがいいよ」

「それならいいけど……」

アキラは竹田の会社の現場作業をするつもりはなかった。アキラのような頭脳労働者は、コロナ禍でリモートワーク中心のお仕事を中心となったが、アキラはプロの小説家になりたくて、占い師になったのだ。占い師ならば、他では聞けない面白い人生経験をたくさん知ることができる。だから、金のことならばなんとでもなるが、占いよりもパワーストーンの販売で売り上げをあげている以上は、小説家としてのネタにもならない。ゆえに、日頃のたまったストレスを肉体労働で発散した方が、心の健康に良いと思ったのだ。

「ところで、アキラの幼馴染の元宮が失踪したって噂聞いたんだけど、本当か？」

「元宮が失踪？ 単純に引っ越したってわけじゃなくて？」

「いや、元宮が渋谷に引っ越したのは知っている。あいつミュージシャンじゃん？ 有名人だから裏サイトで検索かけると色々出てくる。突然ライブを中止したのは元宮が失踪して行方不明になったからじゃないかって噂が流れているぞ」

「去年までは元気だったのにな。まああいつのことだから、ハワイにでも雲隠れしてるんじゃないか？ けど、ライブをバックレたのは知らなかった」

「ダブテックだって、一時期はすごい人気だったじゃん。ハイウェイがリバイバルヒットして動画サイトでもかなり再生数稼いでるみたいだしな」

「ハイウェイは、沖縄民謡がベースになってるんだよ。もともとは、地元の連中とバンド組んでデモテープも作ってたんだけど、ギターの奴が元宮の大学の卒業ライブ後に脱退したから、デビューアルバムは何曲か、バンドで作った曲が採用されているみたいだけどな」

「失踪したとしたら、そんなに気の弱い奴にも思えないから不思議でしかたないな」

「まあ、相方の外人と喧嘩してヤケを起こしたか、それとも、意外と蒲田にいたりしてな」竹田はスマホに目をやった。アキラは竹田の後ろから流れているテレビの音声を聴いていた。銀色の灰皿にはアキラが吸ったタバコの殻が山積みになっていて、ちょうどタバコもあと一本でなくなるところだった。この一本を吸いきったら禁煙しようと思うのである。

「もう2時近いな。そろそろ行くわ」

そう言って竹田はビールを飲み干して帰って行った。

### 3

2022年8月12日、スタージョンムーンという満月の日に、アキラは蒲田の心療内科にいた。銀色した外装の9階建てオフィスビルの5階には、小さな心療内科がある。JR蒲田駅からのアクセスも良く、地元住人だけでなく県外からも通う人も多い。この院長先生は、話をじっくり聞いてくれるので評判が高い。大抵の心療内科は、薬を処方することで利益をあげているし、一人の患者にかけられる時間は5分程度なのだ。アキラの通う心療内科は、午後5時を過ぎるとセキュリティの関係で鍵がかかってしまい、外部からは入れない。そのため、どんなに混雑している日でも、午後5時までにはビルの中になければならない。

アキラは診察室を正面にして受付から見える位置にあるソファーに腰かけていた。薬を処方してもらっただけだから、院長以外の先生でもよかったのだが、あいにく休みの関係で院長の診察の日にあたってしまったのだ。

満月の日に心療内科にかかるとは、なんとも皮肉な話ではあるが、竹田から貰っている現場仕事が13日からお盆休みに入るので、一日だけお盆休みを早めて貰ったのだ。

待合室で待ってる間、ずっとダブテックの元宮のことを想っていた。というのは、元宮の父親が重度のうつ病になった時、代わりに待合室で呼ばれるのを待っていたのは彼のおかあさんだったのだ。

元宮のお母さんはこの心療内科で再会を果たした。

アキラと元宮勇氣とは、もともとは4歳の頃から同じマンションに住んでいた幼馴染であった。元宮は中学二年生の時に、同じ蒲田に新築の家を建てて引っ越していった。小学校の6年間と中学校の2年間、計8年間通学を共にした。

21歳を超える頃、風の噂で元宮がミュージシャンを目指していることを知った。アキラは思春期の頃、引きこもりがちな少年で、高校も中退しているから、地元の友達しか繋がりがなかったのだが、アキラを引きこもりから救ってくれた新城隆則(たかのり)と元宮が中学の頃からの親友だったため、新城に引っ張られる形で、蒲田の音楽スタジオでアキラと元宮は中学卒業以来の再会を果たした。

新城はプロのギタリストになることが目標だった。蒲田のメジャーシーンで活躍する品川区戸越出身の海斗(かいと)と元宮が友達であったため、海斗から『お前たちが本気で音楽でやっていきたいのなら俺が応援する』と言われ、新城は仲間たちと共にデモテープ製作に励んだ。しかし、彼は目の前で苦しむ友人のアキラをどうしても放っておけない思いでいた。そして、最終的にはプロになるチャンスを犠牲にして、アキラと一緒にいることを選んだ。アキラは新城の励ましのお陰で、社会復帰し彼女ができるまでに回復した。だが、新城が捨てた夢を引き継ぐことでしか恩義の返し方が解らずに、アキ

ラは夢と現実の狭間において、いつも夢を選択していきってきたのだ。だから、元宮がダブルテックというユニットを結成して、ハイウェイという楽曲がラジオや有線でヘビーローテーションでかかるようになった時、元宮と家族の次に喜んだのはアキラだった。自分や新城が叶えられなかった夢を元宮は叶えてくれた。しかも、武道館で単独ライブをやるほどに大躍進したのだ。元宮は地元では知らない人がいないフードスターとなった。アキラと元宮と新城をつなぎとめているモノ、それは仏法だった。元宮はもともと法華経の信者の家に生まれたが、新城とアキラは元宮の影響で仏法を信じる様になった。だから、アキラにとって新城と元宮はかけがえない恩人なのだ。

アキラは心療内科の待合室の窓の外を眺めた。朝から来たのに、もう外は真っ暗だった。時計をみた。19時を悠に回っている。時間は永遠のモノと感じられた。そのときアキラの右側から自分の名前を呼ぶ声がした。受付ではないその声は懐かしい響きだった。

「はっちゃん？」

アキラは右側へ視線をやった。白髪とマスクで雰囲気が変わっているが間違いない、元宮勇気のお母さんだった。

「久しぶりです。お元気でしたか？」

「ありがとう。ぼちぼち元気だったよ」

アキラはソファの左側に寄って、座ってくださいと促した。元宮のお母さんは、白の7分丈パンツに黒のワンピースを合わせていて、胸元はシースルーでひらひらとしたゆるフワ系のリラックスした格好で、足元は夏らしい小麦色のサンダルを履いている。

「はっちゃんはだいぶ久しぶりだったけど、どうしたのかな？ って思ったところなのよ」

元宮お母さんはマスクをして解らないが、若い頃は可愛い系美人として近所でも評判の女性だった。アキラのことをはっちゃんと呼ぶのは元宮とその家族くらいだ。

「はい。ママさんと再会した後、病院を変えたのですが、もともと睡眠薬しか貰ってないので、時間の融通が利く蒲田に戻しました。ところで、勇気は元気ですか？」

アキラが質問するとママさんは少しの間、沈黙した。意を決して口を開くまでに30秒は経過していた。

「実は勇気、行方不明なのよ。ダブルテックのライブもキャンセルして実家に帰ってきたのだけど、様子がおかしくてね。パパもうつ病だから、遺伝の可能性もあると思って、しばらくは様子を見てたんだけど、ちょっと外出してくるって言ったまま帰ってこなかったのよ。それで、自分で借りてるマンションにでも帰ったのだろうと思っていただけだけど、ある日、勇気の事務所の社長からも連絡があって、レコーディングの日にスタジオにも来ないからマンションに呼びにいったけれど、探さないで下さいって置手紙だけがあったらしいの」

ママさんはそこまで話すと、喉が渴いたのかペットボトルのお茶を口にした。

「探さないで下さいって、昭和初期のドラマじゃあるまいし。なにがあったのかはわからないですけど、逆に、探してくれって魂胆みえみえでアイツらしいですけどね」

「そうなの？ 勇気って変に気弱になる時期があるし、もともと身体も強い方じゃないから心配でね」

「一人っ子ですものね。ママさんからしたら心配する気持ちお察しします」  
「パパの影響で私まで鬱っぽくなっちゃって、勇気のこともあるし、はっちゃんには悪いけど、今日の診察は長くなりそうだわ」

元宮のママさんは気丈な人だと思っていたが、そこまで事態が深刻だったとは思わなかった。きっと家族にしか解らない何かがあるのだろう。しかしながら、アキラは、元宮なら絶対に大丈夫だという強い確信があった。彼は少し疲れているだけなのだ、と。

「はっちゃん。もし、勇気の居場所が解ったら、誰にも言わずに私に教えて。たぶん、強気に見せてもナイーブなところがあるから、しばらくはうちでかくまってあげたいのよ」

ママさんはそういうと、メモ帳を取り出し電話番号とメールアドレスを書いてアキラに渡した。

「解りました。勇気にはいつも助けて貰ってばかりでしたから、今度は僕の方から彼の力になってあげたら嬉しいです。ちょうどお盆休みにもなりますし、実は勇気と僕は誕生日が一日違いなんです。僕が8月27日で彼が28日生まれ。だから、なんとなく気持ちは解ります。誕生日が近くなると、人は色々考える機会が多くなります。このタイミングで彼が失踪したということは必ず何か意味があると思っています。」

アキラはママさんの手を握り締めていった。もしも時代が違ってたとしたら、元宮のママさんのような女性を放っておくことはないと思っていた。それは一種の憧れや恋心とも言える。何も知らなくて無邪気だった少年時代、元宮のママさんはいつも温かく向かい入れてくれた。マンションの2階から鉄骨の階段をだだんだんと勢いよく駆け降りると、インターフォンを鳴らす前に一階の元宮家のドアが開き、小麦色の健康的な肌のママさんがにこやかに、はっちゃんおはようと挨拶をしてくれると、子供心に嬉しさと恥ずかしさが混じりあい、こんな素敵女性と結婚できるのだったらなんでもやると決心するのであった。

元宮の父親は日本ではじめてサーフィンを持ち込んだグループの一員で、プロサーファーになることが夢だったのだが、サーフィン中に大怪我をしまい、紆余曲折あったが、持ち前の手先の器用さを活かして、サーフィンのアパレルブランドを立ち上げた。地元蒲田では知らない人はいないと言えるほど、伝説的なサーフショップのオーナーになり、バブルの時代にマンションの価格が一番高かった時期に、蒲田に新築のマンションを買えるほどに経済的にも成功を果たした。

アキラは元宮のパパさんのようなお洒落でロックな破天荒な生き方をしている大人の余裕がある男だったら、ママさんが惚れるのも無理はないと思い、お坊ちゃん育ちである自分のことを蔑んだ。

「ママさん。勇気の生年月日と血液型と出生地、出生順さえ解れば琉球占術という的中率の高い占いで、彼の居場所を特定してみせますから、彼の出生地だけ教えてください」

「ありがとう。勇気は生まれも育ちも蒲田だよ。ところで琉球占術ってなに？」  
「琉球占術は、僕が本業で使っている的中率の高い占いのことでして、東洋占星術、数秘術、古典風水に加えて心理学の要素をミックスさせた沖縄発祥の占いです。持って産まれた天運色や天運数、運気があがる方位や時間など色んなことが読み解けます」

「へえー面白そうな占いね。私も運気のあがる色が知りたいわ。でも、なんで占いを学ぼうと思ったの？」ママさんは興味深々といった表情を浮かべて、アキラは少し安堵した。

「単純にはじめは女性からモテたかったからですよ。思春期の頃にエレキギター始めるのと同じ理屈です。でも、夢を追いかけている割には、結婚願望が強く、長いこと運命の女性との出会いを求めているのです。それで、ご縁があって沖縄発祥の琉球占術と出会ったんです。占い師として活動する中で、運命の人という鑑定がでたらお付き合いすればよってアドバイスを頂いて、プロの占術師になりました」

「なるほどね。はっちゃんも昔は本当に喋らなくて密かに心配してたけど、今では占い師ができるくらいにコミュニケーション力が上達したのね」

ママさんは少し頬を赤らめていう。思えばコミュ障をなおすために色々訓練してきたものだとかアキラは思う。

「今でも、コミュニケーション障害の気はありますけどね。占いだとかカウンセリングとかで使う傾聴の技術さえ守っていればお客さんが勝手にベラベラ喋ってくれますから」

ママさんは幼き我が子を見つめるような瞳でアキラをじっと見つめた。

「それで、彼女というか奥さんとは出会えたの？」忘れかけていた遠い恋愛の記憶を懐かしむようにママさんは尋ねる。

「はい。いちおう、占い上では運命の人とでた彼女とお付き合いして7年目になります」

「お名前はなんて言うのかしら？」

「詩音です。星崎詩音」

「ひょっとしてジャズシンガーの星崎詩音ちゃんじゃない？」

「ええ、いちおうジャズの世界では名の知れたボーカリストみたいですけど、よくご存じでしたね」

「詩音ちゃんは星崎財閥の娘さんとして若い頃から知ってたのよ。大きくなって、とっても可愛らしくて顔も小さくて羨ましいわ。小麦色の肌してて胸も大きいからドレスを着せるとまるで別人みたいに妖艶になるのよね」

「まあ、本人はビジュアルで評価されるのは不本意みたいですけど、ママさんがそこまで褒めてくださるならば、恋人として嬉しい限りです。僕の理想は、ママさんみたいに小麦色の肌して健康的な美人に憧れてましたから」

アキラは長年胸の奥に大切にしまっておいた淡い恋心を告白した。ママさんはさっぱりとした表情を浮かべている。息子の同級生からの告白にも大人の女は嬉しいものなのか。

ママさんが診察室へ入っていった後、アキラはふいに過去に起きた出来事を思い返していた。

ここ数年でアキラが所属している占いとパワーストーンのお店『ミラクルスポット』は様子が変わった。那覇の国際通り中ほどにあった一号店が潰れるだけでなく、広島や和歌山などにあった姉妹店も続々と閉店を余儀なくされた。しかし、ミラクルスポットはインターネット店がメインのため、沖縄のカーゴスにある本店は主に発送作業がメインとなっていて、全国の鑑定師からのパワーストーン製作依頼や鑑定書の発行作業だけで経営が成りたっていた。アイドル占術師のKAKOや人気ナンバー2だった絢(あや)香(か)が独立していき、アキラと詩音が出会った時の7年前のメンバーとは顔ぶれが一変した。

7年前、星崎詩音は22歳でまだ男性経験がなかった。アキラとは琉球占術を通じて

出会ったのだが、詩音はアキラと出会う前からインターネットで彼のSNSを隈なくチェックしていた。

アキラは未来、小説家になりたくて占い師の世界に飛び込んだのだが、彼の人生は波乱万丈で、思春期の頃、5年間ほど家に引きこもったり、自殺未遂も経験していた。

詩音は政財界に強い影響力を持つ星崎財閥の父親の一人娘で、母親も名家の出身のため、思春期には門限が設けられるなど過保護に育てられた。その反動で、大学時代には一人暮らしをして、親の監視下から離れて友人たちとラーメン屋巡りなどをしていた。詩音にとって、庶民が行くようなお店は、むしろ憧れでもあったのだ。

不自由な生活を余儀なくされていたため、アキラのような自由人に惹かれて、琉球占術の初級鑑定師になった。詩音ははじめから、アキラに近づくことだけを目的にして、2015年9月13日に東京帝国ホテルでの面接を口実にして、アキラと出会うなり、そのまま彼をハイヤーに押し込めて羽田から琉球王国こと沖縄県へ旅立った。そして、アキラは詩音のヴァージンを奪った。

付き合い始めた頃、詩音はアキラにべったりだった。四柱推(しちゅうすい)命(めい)を通して、干合(かんあ)といって淫乱の合の関係性だし、マヤ暦でも詩音がアキラをガイドする役割を持っているし、宿曜占術(しゅくようせんじゅつ)を使ってみても共に親しみ榮あう榮親(えいしん)という最高の相性だったからだろう。

しかしながら、付き合い始めてから7年という月日がたった現在、ミュージシャン志望だった詩音は、JAZZシンガーとしてCDデビューする夢を叶え、もともと資産の配当金だけで億単位を稼いでいる成功者のため、プロの小説家志望のアキラはなかなか結果が出ない焦りと戦っていた。彼女の方がどんどん出世していき、自分だけがヒモ男のように詩音にぶら下がっている。

アキラだって江戸時代に苗字帯刀(みょうじたいとう)を許された商人の家系の生まれだから、おばあちゃんの代までは東京千代田区の神田に生まれた生粋の江戸っ子だったのである。アキラのお母さんは、沖縄では有名な財閥の娘だった。アキラの母親の代までは、幾ばくかの財産分与を貰ったり、長男から定期的な資金援助を受けていた。そのお金は本来ならば、アキラの学費に充てられる予定だった。しかし、アキラは大学に行く費用には使わなかった。

彼はもともと高校を中退しており、そもそも教科書通りの教育に疑問を抱いていた。しかも、普通とされることが苦痛以外の何物でもなく、世間一般の常識など、時代の変化と共に変わっていくものだという悟りを得ていた。そのため、アキラは人が怪しそうと思ってためらうような仏法やスピリチュアルな世界での学びに投資をして、さらには占い師になると言い出したのだから、もしも彼が一般家庭に生まれていたら、とてもじゃないけれど危なっかしくて一人にはさせておけないはずだった。しかし彼の両親は世間一般の親とは全く異なる考えを持っていた。

アキラが橋本家の末っ子として生まれた時、占い師の行商から「この子は将来大物になる」と言われ記念に手形を取った。さらに父親がアキラの名前を考える時、占いをもとにして決めた形跡がみられるのだ。

アキラという名前は文章の章からとって名付けられた名前だが、アキラが占い師として自分探しの旅をしている最中に面白いほど、小説家が天職であることを物語っている

かのような気づきを得たのだった。

彼の誕生日である8月27日を数値化すると827になり、この827は144番目の素数となるので、そもそも144とはアキラが生まれ育った大田区の郵便番号なのだ。しかも、彼の実家近くには郵便局の本局と支店の2店舗がある。アキラはダブテックがインディーズながらデビューアルバムが280万枚の大ヒットを記録したことにヒントを受けて、インディーズ作家を名乗り、その世界では有名な作家ではあった。

『3歩進める時もある。』という彼の自叙伝的エッセイ集は累計5000ダウンロードを記録していて、ブラウザで読むだけの一見さんを含めれば、蒲田周辺では彼はちょっとした有名人ではあった。なぜプロになる前からエッセイ集を出したのかといえば、有名になる前に実績を作っておいた方が出版社にアピールできるからという戦略的な側面もあるが、一番には引きこもりで苦しむ人たちに向けて、引きこもりでも必ず蘇生できる、というメッセージを伝えたかったからだ。彼は法華経(ほけきょう)を供養することにより仏になった。

ママさんが診察室から出てきた。晴れやかですっきりとした表情を浮かべている。

「橋本さん診察室にお入りください」というアナウンスが流れて、アキラはママさんに軽く会釈してから診察室に入った。今日は満月。ここで出逢ったのも何かの縁。

アキラは元宮家との不思議なご縁をしみじみと実感していた。先生からは大した質問ははず15分ほどで診察は終わった。帰り道、満月は妖しく光って当りを照らしていた。



## 4

お盆休み初日目。

アキラは寝ぼけ眼で窓の外を眺めた。東京は曇り空が広がり、天気予報によると昼過ぎからは雨が降るといふ。時計をみると10時を回っている。朝食には遅すぎる目覚め。無造作に布団を二つに折ってまとめる。

築50年近く経つぼろいアパートだが、鉄筋コンクリートで音にも強いし、1DKでトイレ風呂別の優良物件に住んでいる。ダイニングキッチンには壊れた冷蔵庫の上に電子レンジが置かれ、台所は空き缶やペットボトルなどが散乱している。アキラは片づけがあまり得意ではない。

折り畳み式のテーブルの上には、飲みかけの缶コーヒーと朝食用に買った総菜パンが置かれている。腹は空いていなかったが、長年の習慣によりパンを食べることにした。キッチンに背を向けて、アキラの視界には本が山積みにされたメタルラック。その隣には、お気に入りの本だけを収納したカラーボックスがある。

ふと宮沢賢治の銀河鉄道の夜が目にとまり、アキラは立ち上がってそれを手にした。貧しい主人公のジョバンニと素晴らしい人格を持つ副主人公のカムパネルラ。夢の中で二人は銀河鉄道に乗って旅をする。アキラは少年の頃にこの作品を読んで宮沢賢治こそ世界一の作家だと確信した。

宮沢賢治と同じ誕生日に生まれ、章という名前の謎を追い求めた青春の日々が蘇ってくる。アキラはスマホを手にして、橋本章を姓名判断で占ってみた。外格以外は全て大吉と出る。弱点が見当たらないほどの吉数を持ってこの世に生まれてきたようだ。現実はどうだろうか。

占いで運命の人という鑑定結果がでる金持ちでジャズシンガーの星崎詩音とお付き合いをしていて、それだけでも人から羨ましがられるに違いないが、自分の夢と言えば、幾らインディーズ作家として名を上げたとはいえ、プロの小説家にはとうてい敵わない。売れる作品が書きたいとは思わない。ただ、不器用に生きてきたこの人生の爪痕みたいなものを文壇の歴史に刻みたいだけなのだ。

アキラは食べかけのパンをゴミ箱に入れてタバコに火をつける。元宮の失踪のことについて、考えを巡らせていた。彼ほどの実力者が失踪する理由など到底思いつかない。ただ、彼の考え方は自分には解る気がする。誕生日が一日違いだからかもしれない。

小雨の東京を一人歩く。低気圧の影響で少しだけ頭が痛い。夏の雨は独特の匂いがする。焼けたアスファルトを優しく包む水の匂い。こうして街を歩いていると、だいたい街

に活気が戻ってきたような気がする。蒲田の裏路地を抜けると、ラーメン屋の前には行列ができていて、パチンコ屋の出入りも激しい。お盆休み初日目とはいえ、大田区最大の歓楽街である蒲田はたくさんの人で賑わっている。

JR蒲田駅にたどり着く。スタバのコーヒーの良い香りがしてくる。駅中のコンビニでブラックコーヒーを買って、一口だけ飲んだ。幸いなことに帰省ラッシュに巻き込まれずに銀座へと迎えそうだ。

アキラは有楽町までたどり着く。東京交通会館の一階にある本屋で詩音と待ち合わせしていた。職業柄、占いの本に目がいってしまう。2022年下半期星座別運氣ランキングなる本がすでに100万部も売れているようだ。ビニールで包装されているため、試し読みもできない。12星座だけで運氣が解るようならば、自分と元宮と詩音だって同じ乙女座なのだから、とてもじゃないけど、元宮が失踪した理由の解明の参考にもならないだろう。

「アキラお待たせ」

振り返ると星崎詩音がいた。詩音は胸元がVの字に空いた裾の長い黒のワンピースにチャコール色のブーツ姿で現れた。皇室ご用達のエメラルドグリーン色したショルダーバッグをかけている。ほんのりシャネルの香りがしていた。金髪に近い直毛の前髪をくるとカールさせているのが特徴的だ。

「今日はお洒落してきたんだね」

詩音はロングTシャツにジーパンというスタイルが定番なので、アキラは面くらった。「いちおう久しぶりのデートだからね。アキラのほうこそお洒落じゃん」

アキラは詩音に買って貰った緑色のラルフローレンのポロシャツに、桜色したサマーカーディガンを羽織っている。黒い本革のブーツにジーパンなのはロック好きな彼のこだわりでもある。

「アーティストも正月とお盆は休みってわけか。売れない小説家だけが年中無休ってわけだ」

「せっかくのデートなんだから、辛気臭いこと言わないでよね。どう小説は進んでる？」

詩音はアキラの手を掴んでいった。

「まあ、今年一年は自分を鍛える年にしても良いかなあ」

アキラは手に取った本を戻しながらいう。さあ、これからどこにいかと詩音に尋ねると、せっかくのデートだしアキラの故郷に行きたいと詩音は言った。アキラは蒲田なんかに行ってもやることがないと渋ったが、詩音はアキラをJR有楽町駅へと誘導した。

蒲田に着くとお腹が空いたねと詩音が言うので、蒲田駅東口を散策することにした。大田区最大の歓楽街である蒲田は、ラーメン屋やとんかつ御三家、羽根つき餃子など、B級グルメで戦わせたら、世界一と言えるほど豊富にラインナップされている。

「詩音ちゃんは何が食べたい？」

「ん。そうだなあ。蒲田と言えば、ラーメンか餃子かなあ」

「それじゃうちのアパート近くに羽根つき餃子が美味しい店あるからそこに行こう」

天気は小雨から曇り空へと変わっていた。蒲田は昔、沼地で海拔が低かったためか、晴れの日が多い。都内の天気予報が外れることがよくある。詩音は折り畳み傘をしまい、アキラはそれを自分の肩掛けバッグにしまった。詩音が手を繋ごうとしてきた。手を優

しく撫でて、道が狭いし並んで歩くと危ないからと言ってアキラはその手を離した。

付き合って7年も経つというのに、詩音が蒲田に来たのは、今日を含めて数えるほどしかない。大抵はアキラの方が蒲田に飽き飽きしているのだから、どこか違う街で新しい発見をしたいと言って詩音を騙してきた。なぜならば、蒲田は良い面だけでなく、夜になると中国人の立ちんぼやキャバクラの呼び込みなどが路上で声掛けをしていて、お世辞にも治安が良いとは言えないからだ。

しかも彼は時々、悪友の竹田などに誘われて風俗遊びもしている。風俗嬢とは身体との関係は持たないことにはしているが、それも小説家になるための芸の肥やしと考えているのだ。しかし、純愛から始まった詩音にはそのような言い訳は通用しないだろう。

アキラがはじめてお付き合いをした女性も、絶対に怒らないからと前置きした上で、アキラの風俗経験について尋ねてきたことがある。アキラはしつこく迫る彼女の根気にまけて本当のことを話した。しばらくは、笑っていた彼女だったが、だんだんと泣き顔になっていき、しまいにはぼろぼろと涙まで流して泣いてしまった。初恋というのは、そういう面倒くささを伴うものなのだ。

詩音だってアキラが初恋の人だから、同じようなリアクションをするに違いない。身体との関係は持っていないとか、話を聞いているだけだとか、そんな言い訳は通用しないことなのも解っている。けれども、学がないアキラにとっては普通とされる生き方をしていたらとてもじゃないけれど、面白い小説などかけるはずもなかった。占い師になったのも、すべては小説家になるためと割り切っている。しかし、なぜそこまで小説世界にこだわるのかは彼自身でも理由が解らないでいた。

コンビニでお菓子とお茶を買い、アキラのアパートへとたどり着いた。詩音は入るなり、タバコの匂いでむせた。詩音はマスクを取るとお茶を開けてグビグビと飲んだ。相変わらず人を虜にする容姿をしているものだと思う。詩音を畳の部屋に座らせたまま、アキラは換気扇の下でタバコを吸う。なんて事はない日常の風景だと思っていた。この後は、詩音とまったりと映画でも観て夕食を共にして一夜を共にする。詩音が隣で寝ていると、まるで赤ちゃんと一緒に寝ているみたいで、とても癒される。そんな日常がこの先、結婚して夫婦になっても続くと思っていた。アキラがシャワーを浴びている時に事件は起こった。

アキラがシャワーから出ると、いつものようにコーラを飲んでいて、詩音は不審な様子でそわそわとしている。気のせいかと思ったが、その直感は正しかった。

「アキラ。一つ質問してもいい？」

気づくと詩音は帰り支度を済ませていた。

「今日何を食べようかって？」

アキラは能天気なまでに今日の幸せな日々を囁みしめていた。

「リエって誰？」

詩音の言葉にアキラは絶句した。なぜ、詩音の口からリエの名前がでてきたのだろうか。

「女友達だよ。ほら俺って、占術師じゃん？ 女性客相手の商売だからいちいち名前は憶

えてないこともあるけれどな」

詩音はさらに疑いの目をアキラに向ける。こんなに怖い目つきを見るのははじめてだ。「ローズの泉のリエちゃんでしょ？ ローズの泉って蒲田では有名な風俗店なんですかね」

詩音は有名私大のK大卒で頭が良い。LINE通知でリエの名を知り、すぐに検索をかけたのだろう。アキラはこんな日に限ってメールしてくるリエを恨んだ。

「友達の付き合いでさ。一度だけ言った店だよ。でも、エッチなことは何一つしていない。信じてくれとは言わないけれど、俺にとって詩音ちゃんが一番大切なんだ」

アキラはこのような修羅場にはなれていない。明らかに自分が犯した罪を違う話にしてごまかそうとした。詩音はその隙を逃さなかった。

「一番がいるってことは二番も三番もいるってことじゃん。悪いけれど、アキラとはもうこれでお別れだね。7年も付き合ってきて、アキラがこんなに浮気性だったなんてはじめて気づいた。じゃあね」

詩音はそう言って玄関で靴を履いて飛び出していった。シャワーを浴びたばかりで裸だったアキラは追いかけることすらできずにぼんやりと玄関のドアを眺めるだけだった。

## 5

お盆休み初日目の夜、アキラは蒲田のパチンコ屋にいた。

本来ならば恋人である詩音と楽しい夜を過ごしていたはずだった。しかし、浮気がバレてヤケになって夜の蒲田を歩いていたら、タバコが吸いたくなって気づいたらパチンコ屋でスロットを打っていた。

占い師だから、未来が解るとかそういった類の話はほとんど信じないが、今年は彼にとって試練の年まわりとなっている。8月27日の誕生日が来れば、もう42歳になるのだが、一向にプロの小説家になれる気配がない。インディーズ作家として有名ではあるが、それはあくまでもボランティアのような活動であり、プロデビューした時にファンがいたほうが楽だから、というのも無料で書き続ける理由の一つだった。

幼馴染の元宮は失踪しておかあ様から行方を捜すように頼まれているし、恋人とも半ば強引に別れ話を切り出されてしまった。

アキラの座った台は不思議なまでに、ビッグボーナスをひき続けた。コインが溢れるばかりに受け皿にたまり、次のボーナスをひいたところで、彼はタバコを吸いに席を立った。

喫煙所ではスマホでデータを眺めている常連客が2人いる。アキラは缶コーヒーを飲んだ。ビッグが出るたびに缶コーヒーを飲んでいたら、糖尿病にでもなっちゃうなと思いつつ、自虐的に自分を痛めつけているのだ。酒飲みが酒に溺れるように、そうすることで一時的な痛みを忘れることができる。もしも、自分が蒲田なんか生まれていなかったら。もしも、小説家になんてなろうと夢をみなければ。今日のようなことにはならなかったはずだ。

ガラス張りの喫煙所からは、パチスロを打つ客の後ろ姿が見える。コインは受け皿にいっぱいになっているようだが、勝っているのか負けているのかもよく解らない。まるで過去に殺人を犯した罪人のように、背を丸くして帽子を深くかぶって素性も解らない。

この街は昔、ヤクザやヤンキーで溢れかえっていた。中学校の通学路には、キャバレーやピンクサロンなどの怪しい看板がある。売春や恐喝などなにかしらの犯罪に巻き込まれてもおかしくない危険な街だった。

いつからだろう。この街からヤクザが追放されてヤンキーも見かけなくなった。ポイ捨て禁止の清掃活動や青少年への声掛けなど地道なボランティア活動によって、こんなにも平和な街に生まれ変わった。それに蒲田は少々の悪戯をしたとしても笑って許してくれる風潮がある。夢追い人に優しい街だ。

こうして、喫煙所から見える景色というのは、色んな人生が垣間見えて楽しい。いつだったか、青年期の年末にも思議な事件が起こった。

その日は夕方から父親がお正月の料理を作っていた。アキラは翌日の1月1日に法華經を信仰する団体に入会する予定だった。スーツで来てくれと言われていたので、兄貴と一緒に部屋にいて、洗濯ものなのか洗ってある衣服なのか解らない状態の中で、ネクタイを探していた。すると、父親が調理をしていたキッチンで異変が起きた。包丁か何かをまな板にバーンと激しく叩きつける音が聞こえて、アキラはキッチンへと向かうと、父親が怒りに身を任せたまま家を飛び出して行ってしまったのである。彼は自分のせいだと思った。

もともと真言宗の由緒ある家系に生まれながら、父親たちとは一緒のお墓には入れないといっ、法華經に帰依したのであるから、世間体をきにする父親なら怒ってどうぜんだ。アキラはダメもとで南無妙法蓮華經と唱えた。すると、不思議なくらいに脳内がすっきりして落ち着きを取り戻したのである。衣服を洗うものと洗わないものに分けて、洗ってあるものは再度畳みなおし、シャツやアウターはハンガーにかけてクローゼットにしまっていった。そして、探していたネクタイは、山積みになっていた衣服の一番下の方で見つかった。

次に不思議なことが起きたのは、怒って家を飛び出していった父親が上機嫌で帰ってきたことである。父親は両手にお菓子やジュースが入っていると思われるビニール袋を持って帰ってきて、アキラに手を洗ってきて食べるようにと促した。話を聞くとどうやらパチンコでだいぶ勝ったらしくて、アキラは父親からちょっと早めのお年玉を貰ったのである。南無妙法蓮華經と唱えると良いことが起きるとい、はじめての確信に変わっていった。

アキラは喫煙所で2本目のタバコを消し終えたところだった。色んな思い出がふとした瞬間に蘇ってくる。文章を生業とする人間にとっては特筆すべき才能かもしれない。

アキラはボーナスゲームを消化して、メダルをドル箱に入れると席を立て、メダルを店員に渡した。1027枚の数字が表示され、約2万円の勝ちが確定した。店員がお手拭きをくれて、印字された紙を渡された。それを持って一階のカウンターまで行き、景品と交換をする。パチンコ屋でお金と換金するのは違法行為だ。だから、パチンコ屋の近くには必ず景品交換所があり、そこで金を現金に換える仕組みなのだ。

アキラは約2万円を手にとると、虚無感に襲われた。こんなあぶく銭を手にしたところで喜びを分かち合える人がいないことに寂しさを感じた。そもそも、大財閥のご令嬢の詩音だって、自由自在に生きている人生に憧れて好きになったと言うが、友達の付き合いで風俗に行ったくらいで嫌いになるくらいならば、7年も付き合いしてきた方が不思議でしかたない。

占いで見ると、悪友の竹田とは安壊(あんかい)という壊し壊される最悪の関係性であることに気づいてはいた。身体だけの関係性だったら、風俗は浮気というよりは男の欲望を発散する場所なのだから、女は気づいていても気づかないふりをするのが大人の対応なのだと思っていた。

十六夜(いざよい)の月が東の空に瞬いている。いざよいとは、ためらう、進めないという意味の「いざよう」が名詞化したもの。次の十六夜は9月11日。この日は、奇しくもアメリカの同時多発テロが起きた日に重なる。

失ってみてはじめて気づいた詩音への愛情。この十六夜の語源のように、ためらい、進

めないこの心を今夜救って欲しい。

ふと幼馴染の元宮の顔が浮かんだ。彼はアメリカ同時多発テロが起きた日に、世界貿易センタービルに上ろうとしていた。たまたまその日は寝坊したために、一命をとりとめたのだった。彼は2機のジャンボジェットがビルへと突っ込んでいった瞬間、バックドラフトにより身体ごと吹っ飛ばされた。何が起きたのか解らないまま、必死に逃げた先は、レゲエのレジェンドボブマーレーが倒れ、ジョンレノンが暗殺された場所だった。

彼は戻りつつある意識の中で、生きるとはどういうことかということに考えを巡らせていた。俺が寝坊してなければ予定の時刻に世界貿易センタービルに上っていて死んでいた。そうだ、俺は一度死んだんだ。もしも、この身体を自由に使えるとしたら俺は何がやりたい？ そして、彼が導き出した答えのようなもの。俺は世界平和のために歌を唄おう、と。

アキラは無意識のうちに公園まで歩いてきた。夜風は頬を濡らすように涼やかに吹きぬけていく。桜の樹は鮮やかな緑色のグラデーションを創りだし、街灯の明かりに照らされて、春などなかったかのように巡りゆく季節を彩っていた。力なくベンチに腰を掛ける。

(こんな哀れな姿を元宮に見られたら彼は怒るだろうか)

アキラの中で何かが弾けて壊れそうだった。もう2週間後には誕生日がくる。その翌日は元宮の誕生日だ。彼は一体どこで何をしているだろうか。会いたい。今すぐに会って、励まして貰いたい。

夏の音は神秘的なまでに魂を浄化してくれる。どこからともなく聞こえてくる風鈴の音。大地の鼓動。樹々が揺らめいて、時計の針は残酷なまでに別れのサインを告げる。眠りにつくとき、人は一度死んでいるのだと聞いたことがある。あの世とこの世を結びつけるもの。現実世界と精神世界を行ったり来たりして、気づいたこと。それは魂のリフレイン。繰り返し繰り返し、何度でも死んでは生まれ変わる。僕たちは光の中にいて、何億光年と離れた星々を行き来する。だから、寂しい時は空を見上げればいい。この空は、誰かが見上げている空へと繋がっている。今夜、私を救って欲しい。アキラは神々に祈った。

## 6

アキラはいつの間にか寝ていた。どうやって帰って来たのかも解らない。布団の横には脱ぎっぱなしの服が散乱している。窓から差し込む光がヤケに目に染みる。珍しく起床と同時に、何か食べたい欲に駆られた。立ち上がって、キッチンへと向かい、ペットボトルの水を飲んで空腹を紛らわす。

戻りつつある意識の中で、昨日の詩音との別れ話を思い返すと、一気に虚しさが心を支配した。なぜ、詩音の後を追いかけなかったのだろうか。

後悔と懺悔の気持ちで頭の中が真っ白になりそうだった。ふと昔のアルバムが見たくなって、畳の部屋の押し入れから古いアルバムを取り出した。ページの最初には、自分が赤ちゃんだった時の写真。アキラは幼少期には女の子に間違えられる子供だった。線が細くふわっとして、大きい瞳にまつげがぐるりとカールしている。アキラは次々とページをめくり昔を懐かしんでいた。

少年ソフトボールチームに所属していたころの集合写真が出てきた。色黒でいまよりもぽっちゃりとした体形の元宮とアキラが並んで映っている。世話焼きでおせっかい。だけど、元宮はいつだって僕に優しくかった。

小学校低学年の時、その日は土曜日で学校が午前中で授業が終わり、元宮と二人でとぼとぼと帰宅していた。異変に気付いたのはマンションに帰ってきてからのことだった。いつもだったら、祖母がいるはずなので、うちの家の鍵はいつも空いていたのに、いくらドアを引っ張っても、チャイムを鳴らしても誰も出て来なくていたずらに時間だけが過ぎて行った。

仕方なくランドセルを背負ったままマンションのエントランスで公園に植えられている樹々をぼーっと眺めていた。

15分ほど経過した後、痺れをきらして、怒りのような感情が湧いていたのである。その時、シャワーを浴びて着替えたばかりの元宮がやってきて『どうしたの？ 暇なら遊ぼうぜ』と声をかけてきたのであった。

僕は元宮に事情を説明した。いつもだったら、鍵が開いているはずの家なのに今日に限って誰もいないこと、宿題が入っているランドセルを持ったままだから遊びにはいけないことを。すると、元宮は『はっちゃんのおかあさんは近くのスーパーで働いてるんだろ。そこに行って鍵を貰いにいこう』と言って、渋る僕をぐいぐいと引っ張って、実家から徒歩3分のスーパーへと母親に会いに行ったのだ。

元宮はサービスカウンターまで来ると、『はっちゃん、ここで呼んでもらえばいいんだよ』と言って僕に事情を説明するように促した。口下手だった僕はもじもじとして、その場に立ち尽くしていると、一人のおばさんがカウンターから出てきて『どうしての？ 迷子になったの？』と尋ねてきたのである。



僕は(迷子になるほどこどもじゃない)と思い、そのことが恥ずかしくてその場から逃げ出したい気持ちでいっぱいになった。その時、助けてくれたのも元宮だった。彼は『この子のおかあさんがここで働いているんですけど、家の鍵がなくてはいれなくて困っていたんです。ですのでこの子のお母さんをお呼びください』と明確に言った。

サービスカウンターのおばさんは業務連絡と称して母親をお呼び出してくれた。しばらくして鍵をもらおうと、普段から無口で表情を滅多に変えない僕だったけど、帰り道、『君はやっぱり賢いよ。頭いいよ』とテンション高く元宮に行って最大限の感謝の気持ちを伝えたのである。

アキラは元宮との写真を見て懐かしんだ後に、部屋に飾ってある詩音との記念写真を眺めていた。これまで、詩音とお付き合いをしてきて、一体なぜ、金持ちのご令嬢の詩音のような魅力的な女性が、一介の占い師であり小説家志望で貧乏のどん底にいる自分と一緒にいることを選んだのだろうかと思いに思った。

詩音と過ごした日々はかけがえのない日々だった。二人でハワイ旅行へ行き、ワイキキビーチで朝食をとった後、レンタカーを借りてダイヤモンドヘッドへ行き、ハイキングを楽しんだこと。KCCファーマーズマーケットで見慣れない果物を眺め、ホテルまで戻りトロピカルなカクテルを飲みながら、プールサイドでとりとめのないお喋りをした。沈みゆくサンセットを眺めながら、まるで沖縄に来たみたいだねって詩音が言う。二人がはじめてお付き合いを決めたあの美しい景色に想いを馳せながら、僕たちにとってはハワイよりも沖縄の海の方が特別なんだって再確認したんだ。離れてみてはじめて解った、詩音への変わらぬ想い。

しかし、今は元宮を放っておけはしない。時として、男の友情とは、長年連れ添った夫婦よりも、血を分けた実の兄弟よりも、かけがえのない熱い何かで繋がっている気がするのだ。女は子供を産み育てる性質から、子供が生まれれば子供が一番になるだろう。男は外に出て、仲間と共に危険を顧みず獲物を狩りに行く。このDNAに流れる狩猟採集民族だった頃の記憶は薄れたかに思えたが、それは確かに心の奥底でうごめいていた。外敵から女と子供を守り、狩りへ行き食べ物を捕ってくる。夏の暑い日には、まあこれでも飲みよってキンキンに冷えたコカ・コーラを買ってきてさ。いかに俺たちが無能で馬鹿なことばかりやってきたのかってことで盛り上がり、仲間の一人がふと空を見上げながらいう、俺、この秋に子供が生まれるんだってさ。じゃあ今日は前祝だなんて誰かが言えば、夜になってみんな集まってさ、ほろ酔いになったら、月明かりの下で夢を語り合う。

そんな風にして俺たちは、誰ひとり置いてきぼりにせずに大人になった。誰かが泣いていれば行って励ましてやり、誰かが笑えばくだらない話ではしゃいで、いつまで経っても子供のまま変わらないねって、まるで夏の祭りの後みたいにさ、真実を知ることになるんだ。

アキラはスマホを手にして、電話をかけた。連絡先は占術の師匠である佳子(よしこ)だ。

元宮が失踪して、彼は何をしでかすか解らない。うつ病にでもなって自殺企図をしているかもしれないのだ。アキラは全てを失ってみて、はじめて元宮のママさんの気持ちや、失踪した元宮の気持ちが理解できるような気がした。普段は気丈に振舞ってはいる

が、そういう人こそ真面目に考えすぎて、現実世界で生きるの意味が解らなくなる。

佳子への電話がつながらない。夜がメインの占い師のお仕事だから、こんな朝早くに起きているわけもないかと肩を落とした。ふと詩音の泣く顔が浮かんだ。ダメだ。追いかけてはいけない。僕たちはもうとっくに終わった関係なのだ。どうにもできない感情を抑え込みながら、今すぐにでも走り出したい衝動に駆られ、コップに水を汲み一気に飲んで干して、タバコに火をつける。もうだめだ、と思われた瞬間スマホから着信音があった。占術の師匠である佳子からの電話だった。

占術の師匠である佳子とは、日比谷の帝国ホテルで待ち合わせだった。お盆休みの昼下がり。8月も半ばになると湿気で暑いという日は少なくない。むしろ千代田区あたりは緑が多いためかたまに吹くそよ風が焼けた素肌に心地良い。アキラは白いTシャツにエメラルドグリーンのサマーカーディガンを羽織り、ジーパンに黒のブーツで帝国ホテルに降り立った。

ホテル内のロビーには季節に応じた装花が飾られていて、花には詳しくないアキラだったが、すぐにそれは色とりどりのバラであることに気づいた。佳子は千代田区に住んでおり、占術の鑑定やパワーストーンセレクトの依頼などは、帝国ホテルやペニンシュラ東京などのラグジュアリーホテルを使っている。年齢は46歳で占術師としては若い方だ。佳子のマジカルカラーは白でマジカルナンバーは4。このマジカルカラーとマジカルナンバーとは運気があがる色と数字のことで琉球占術の核となる鑑定項目のことである。

アキラは先にラウンジのカフェテリアでアイスコーヒーを飲んでいて、佳子には元宮の天運鑑定を依頼している。彼の失踪の原因は果たして琉球占術で何かしらのヒントを得られるだろうか。ふとテーブルに置かれたスマホをみた。待ち受けには詩音と沖縄で撮った2ショットの写真のままだ。アキラはしばらく逡巡した後、待ち受けの写真を消そうとした。その時、聞きなれた声が出て顔をあげると、佳子先生が立っていた。

「アキラ君お待たせ。今日は遅れちゃってごめんね。頼まれていた天運鑑定の読み解きに時間かかっちゃって」

アキラはつい佳子の胸を眺めていた。白いドレスの胸元には、チベットの秘宝である天珠(てんじゆ)という楕円形のパワーストーンと天然石のネックレスが眩くばかりに輝いていた。

「いえ、突然の依頼ですみません。鑑定結果は出たのですか？」

「ええ、今からゆっくりお話しさせていただきますね」

佳子はラウンジチェアに腰かけると、ウエイトレスを呼びホットコーヒーをオーダーした。鞆の中からパソコンとA4サイズ書類をとりだしてテーブルの上に置く。鑑定書を眺めて佳子は首を傾げながらいう。

「アキラ君の幼馴染の元宮君って音楽家としてとても人気があるみたいだね」

「はい。ダブテックというユニットなんですけど、主にジャンルはジャパニーズレゲエに分類されると思います。一時期は武道館でライブをやるくらいに人気があって、今でも根強いファンがいるみたいです」

少し興奮した様子でアキラがいう。元宮は自慢の幼馴染だから褒められると嬉しい。

「でも、この天運鑑定書を眺めていると不思議なことばかりが起きているって感じるのよ」

天運鑑定書は運治があがる色や数字などの鑑定結果が77項目書かれている。

「不思議なことってどんなことですか？」

きっとこの先の話は長くなるだろう。アキラはアイスコーヒーを口にして準備した。

「元宮君のバイオリズムなんだけれども、もともと運気の波にアップダウンがないうえに、今年は最高の年回りとなっているから」

バイオリズムとは10年周期で巡る運気レベルのことで、2から8までの数字で表している。アキラも元宮もバイオリズムが高いということは、もともと強運を持っているということになる。運とは良い人や上質な物や有益な情報との『出逢い』のことをいう。

「最高の年回りですか。僕で言えば、2020年がバイオリズム最高の年だったのですけれど、やっぱり人生を変えるような出会いがたくさんありました。では、元宮も人生に失望して失踪したという訳ではなさそうですね」

アキラは微かな希望をかけて佳子にいう。バイオリズムが高いということは苦勞や苦難に遭遇する確率も低そうだ。

「元宮君の場合、深層(しんそう)心理(しんり)に歓(かん)を持っています。( )一言でいえば、未来型思考をもっていて、とてつもない未来をイメージするとき才能を発揮します。逆に、わくわくする未来を描けない時は、ドン底まで落ちるのも特徴的です」

佳子は嬉しそうな顔していう。きっと彼女も深層心理に歓を持っているから楽しいのだろう。アキラは嬉しそうに話す佳子を見て顔を紅潮させた。

「マジカルカラーは青なんですよ。マジカルカラーってぱっと見の印象だし、無意識の行動のことじゃないですか？ 元宮の場合、知的でクールな印象を持ち、明るくさっぱりとした一面もあることが解ります。マジカルカラー青のキーワードに海と出てきます。彼は幼少期の頃からサーフィンをライフワークにしているので、山よりは海の近くにいると考えた方が妥当かもしれませんね」

「元宮君がもしも仮にバイオリズムが最悪で一番運気の悪い場所に行ったら、天輝地である南の逆、北へと逃げるはずですよ。しかし、これとって今のところ失踪するような直接的原因は見つかっていない。そのことを思えば、運気をあげるために、南へと雲隠れしているようなイメージが湧いてきます」

そこまで詳しく力説すると、

「頭を使ったから甘いものが欲しくなりますね」

と佳子がいうのでメニュー表からケーキセットをオーダーすることにした。

ウエイトレスが数種類あるケーキが並べられているサンプルを持ってきた。

「私はイチゴのショートケーキにしようかな。アキラ君は？」

イチゴのショートケーキはシンプルでおいしそうだが、たくさん種類があって迷う。

「僕も同じのでいいです」

アキラは時間短縮のため佳子と同じものをオーダーした。ケーキセットが届くまでの間、たわいもない雑談がはじまった。

「そういえば、詩音ちゃんは元気になっていますか？」

佳子はアキラと詩音がお付き合いするきっかけをくれた人物だ。最近の事情を知らないとはいえ、純粹なる親心からそう尋ねたのだろう。

「実は、僕が悪友と一緒に地元でお酒を飲んだ後に、中国人がやっているエステに行っ

たんです。そのことがバレて、一方に別れ話をきりだされて家を飛び出していっちゃいました」

「蒲田のエステってことは裏営業の風俗店ってことよね。それは怒って当然よ」

「はい。僕もそう思います」

「けれども、アキラ君のラッキーナンバーは1でしょ？」

「マジカルナンバーが5でラッキーナンバーは1です」

「ラッキーナンバーはその人のエッチ度が解るのよ。数字が大きくなればなるほど浮気症ってことが解るのです。ラッキーナンバーが1だったら、浮気症どころか女性を束縛するような潔癖の人ですからね」

「風俗店とはいえ、やましいことは何一つしていません。あったとしても、女性セラピストが手で性欲の処理をしてれるくらいです。主に、語学や文化交流の目的で行ってましたが、それでも半年に一回くらいですし、表向きはマッサージ店なので施術もしてくれます」

アキラは精一杯言い訳をする。佳子は少しあきれ顔で聞いている。そこにウエイトレスが来てケーキをテーブルに置いていった。

「まあ、詩音ちゃんのラッキーナンバーからも貞操観念が高いということが解りますからね。お嬢様相手の恋愛というのは、そこらにいる一般的な女性よりも疲れるかもしれませんよね」

佳子はケーキに乗せられた苺を頬張りながらいう。佳子だって社長令嬢だし、一体なぜこんなにも自分の周りにはお嬢様タイプが集まるのかとアキラは疑問に感じた。

「まあなんにせよ、別れ話をきりだされたまま2日間も連絡をとってませんから、詩音だってもう子供じゃないし、結婚できない相手とならばそのまま他に好きな人ができたとしてもおかしくはないです」

「アキラ君は詩音ちゃんと7年も付き合ってきたのでしょうか？」

「今年で7年目ですね。詩音は今年で29歳になります」

「詩音ちゃんはアキラ君が追いかけてくることを待っていると思いますよ」

「え？」

アキラは戸惑いを隠せなかった。簡単な女心すら解らなかつたなんて。占術師としてお客さんに恋愛のアドバイスしていることを恥じた。矢継ぎ早に佳子が言う。

「詩音ちゃんはおうちの会社にとっても大切な鑑定師です。彼女の決断次第では、銀座や新宿などの一等地に店舗を構えることだってできます。アキラ君はエリア鑑定師なので、幼馴染が心配な気持ちはわかりますが、早く詩音ちゃんと仲直りしてください」

「詩音とのことだったら大丈夫です。運命から始まった恋愛ですから」

アキラは確信を込めて言う。ショートケーキを食べ始める。甘酸っぱい苺の味が詩音とはじめてキスをした時の記憶を蘇らせた。

「それで、幼馴染の元宮君だけど。彼は有名なミュージシャンなのでしょう？」

「はい。全国的にも有名ですが、特に地元の蒲田では知らない人はいないくらい有名になりました」

「アキラ君の周りには凄い人たちが集まってきますね。やっぱり神に選ばれし人ですよ」

「人は40にして惑わず、50にして天命をしる、とは孔子の言葉ですが、確かに40

歳を超えてから判断に迷わなくなってきました。けど、インディーズ作家として人気が出てきた一方で、僕は元宮の知名度を利用して今の地位があります。実力で勝負できているとは思っていません。もっともっと小説を読んで実力を磨いていきたいです」

アキラは胸の内を打ち明けると、すっきりとした表情を浮かべた。佳子はただ微笑んでそれを見ていた。ケーキを食べ終わるまでの間、ホテル内にはピアノ演奏が流れ、その美しい旋律は中央玄関の吹き抜けの天井へと鳴り響いていった。つかの間の戦士たちの休息は永遠の時間にも思われた。ふと佳子が、眺めていたスマホをテーブルの上に置き話しはじめた。

「アキラ君は苗字が橋本よね？」

アキラはコーヒーカップを持ちながら、はいそうですと答える。

「橋本家は鎌倉時代には羽(う)林家(りんげ)といって公家の家柄だったそうじゃない？」  
佳子はアキラが祖先のルーツを知っている前提で彼に尋ねた。

「うりんげ、ですか？ はじめて聞きました。確かにうちは江戸時代までは苗字(みょうじ)帯刀(たいとう)をゆるされた商人の家系です。けど、鎌倉時代に橋本という性があったなんて目から鱗です」

「苗字帯刀の家系なんて凄いじゃないですか。たぶんアキラ君のご先祖様は高貴な血筋の持ち主で、天からも護られています。だからお墓参りはちゃんとした方が良いでしょうよ」

「はい。うちは浅草にお墓があるので、お墓参りした後に定食屋でとんかつ定食食べるのが楽しみなのです。浅草は天ぷら屋さんとかお寿司屋さんも美味しい店がたくさんあります」

「お墓が浅草にあるってことはご先祖様は相当なお金持ちですね。アキラ君もはじめてお会いした時から、人を圧倒するような気品を感じました。きっと、旧家の出の人だから文章を扱うお仕事は向いていると思います」

「でも、詩音の家柄と比べると、うちは旧家ってだけで金持ちではありません。プロの作家になったとして、果たして詩音の親が結婚を認めてくれるのかも謎のままでした。やはり一度、冷静になって、自分が犯してしまった過ちを反省したりする時間が必要だと思っています。それに、小説家として稼げるようになったら、お付き合いで銀座の文壇バーにも行きたいと思っていますので、果たして詩音がそれを許してくれる器があるかも疑問です」

「なぜ、そんなに小説家になることにこだわっているのですか？ アキラ君は占い師としてもちゃんとやれば、普通のサラリーマンの数倍も稼げるじゃないですか。それに比べたら小説家は稼げない職業に分類されると思います。一部の人気作家は億を稼ぐそうですが、そこまでの道のりはとても長いです。小説は趣味のままの方が良いのではないのでしょうか」

「佳子先生。せっかくのお言葉ですが、やっぱり僕は小説家になりたいです。どんなに稼げたとしても、またどんなに名声を得ようとも、お金のためだけに働くということはしたくありません。例え今が死ぬほどつらかったとしても、必ず幸せな未来があることを小説を通して伝えたいのです。氏名には使命が宿るという言葉があります。使いきれないほどの財産があったとしても健康でなければ意味がないように、人間の幸せはお金では測れません。僕が死ぬときに、後世に残せるものがあるとしたら、それは書籍だけ

だと思えます。自分が死んだ後も誰かの心の中で生き続ける。そういう作家になりたいですし、そういう生き方をしていきたいです」

佳子からの助言は有り難いが、アキラの意思は固まっていた。佳子はぬるくなったホットコーヒーを飲んで時計を見る。

「アキラ君、そろそろ次の予定があるのでまともに入りましょうか。聞きたいことあればなんでも聞いてください」

「元宮は生きていますか？」

佳子は首を左右に振り、解らないと答えた。

「そうですか」

「でもね、諦めちゃいけませんよ。天輝地の南を探してみてください」

「南、ですね。」

「バイオリズムからしても失踪する理由は見当たらない。けれども、あれほどの人気あるアーティストですから、何かしらのトラブルに巻き込まれている可能性もあります。まずは彼のお母さんに許可をとって、彼のマンションを搜索してみてください」

「解りました。あと、もう一つだけいいですか？」

「はい。幾らでもどうぞ」

「僕と元宮はもともと実家が同じマンションで誕生日が一日違いです。これって何か意味があって出会ったということでしょうか？」

「まず、間違いなくソウルメイトでしょうね。前世からの強いご縁がなければそうはなりません。元宮君が音楽の世界で成功したということはアキラ君だって成功する可能性が高いのです。これは、占術をとおしても同じことが言えます」

佳子はアキラが成功すると見抜いているようだ。しかし、当のアキラはどこ吹く風といった具合でのほほんと生きている。運命には逆らえない。これはアキラが生きてきた40年ちょっとの人生で学んだ教訓だ。なるようになるさと運命に翻弄されながら生きていく。

自由気ままに風に吹かれながら、大いなる神という存在に身をゆだねる様に、まるで生まれたばかりの赤子のような純粹さだけがアキラの取り柄である。

佳子とのセッションは実のあるものだった。まずは元宮のママさんに許可を取って彼のマンションを搜索してみる。アキラの脳内には突然死した兄の面影が浮かんだ。こうしてはならない。人間が油断している時は悪魔をも引き寄せる。アキラは有楽町から京浜東北線に乗り、蒲田へと急いだ。たった20分の移動時間さえも今は永遠にも感じられた。

その夜、アキラは原宿にいた。

元宮のママさんから合鍵を借りて、彼のマンションを探していた。原宿のような活気ある街には縁がないアキラだったが、久しぶりに来てみると、ネオンが瞬いていて、どこか哀愁を感じさせる街に変貌を遂げていた。その理由は解らない。通りゆく人々のファッションを目で追いかけると、マッシュやセンターパートの男子と清楚系の女子たちしかいない。韓国ブームの影響を強く感じられた。

アキラは原宿から表参道方面へと歩いていく。お洒落なオープンテラスのカフェや高級なアパレルブランドの服がショウウィンドウ越しに視界に入ってくる。街並みが奇麗すぎて落ち着かない。けど、この街に住んでみたいと憧れる若者は多いことだろう。

どこからどこまでが繁華街なのか解らないほど店舗が密集している。しかし、住所が書かれたメモを見ると、この辺りで間違いない。竹下通りを抜けて神宮前まで来ると高級マンションがちらほら見えて、アキラは裏路地へと入っていく。

5階建てでオレンジの外装のマンション。ガラス面は扇状になっている。マンションの入り口には樹木が植えられている。間接照明でライトアップされていて幻想的だった。アキラはメモを見た。間違いない、この5階が元宮が借りている部屋だ。

マンションのエントランスにあるオートロック式のドアの前で合鍵を回す。中へ入るとラグジュアリーホテルのように装飾品が飾られていて、エキゾチックな夜を演出していた。

エレベーターで5階まで登る。奇しくもアキラのマジカルナンバー5と同じ数字だった。元宮の部屋の前まで辿りつくと、申し訳ないと思いながら合鍵でドアを開けた。

玄関にはエアジョーダンなどのバッシュが何足かころがっていて、誰か部屋にいるのではないかと疑いたくなるほど、生活感に溢れていた。

部屋に入ってみるとすぐにリビングルームだった。元宮が自分でデザインしたブランドのラグの上にソファーやダイニングテーブルが置かれている。テーブルの上には、元宮のママさんが言った通り、探さないで下さい、という手紙が置かれていた。それを見て、アキラはぷっと笑いがこみあげてきた。なんて昭和な奴なんだと思い、自分と元宮の誕生日が一日違いであることを再認識した。元宮の気持ちが手にとるように解る気がしたからだ。

ソファーの横には、音楽家らしくアコースティックギターが置かれていて、一人暮らしでも部屋を小奇麗に使っているのは彼が乙女座生まれだからだろう。同じ乙女座生まれでも、自分の部屋と元宮の部屋の違いに経済的格差を感じる。

オープンキッチンにはウイスキーのボトルとタバコが置かれている。なんてことはない。元宮は音楽家だがハスキーボイスがウリなのだから、酒とタバコで喉を潰すことも



仕事の内だろう。しかし、料理などをしている形跡もなく、外食やウーバーイーツなどを利用してることが解る。

アキラは元宮のプライベートルームへと足を運ぶ。寝室を兼ねているこの部屋には、本棚の上に写真が飾られていて、アキラは見覚えのある顔を目にした。詩音の大学の先輩でジャズピアニストの藤原涼子だ。元宮と藤原涼子の隣には、知らない女が映っていた。元宮との距離感からして、彼女といった間柄ではないだろうかと推測をする。

元宮の部屋は無駄な物がなく、いくら部屋を探しても、元宮と見知らぬ女との関係性を示すものは何も出てこなかった。こうなったら、藤原涼子に会いに行くしかない。幸いなことに彼女は、ジャズの世界では有名人だ。インターネットで調べれば、いつでもライブをしているかが解るだろう。アキラはスマホで藤原涼子のプロフィールを探した。どうやら、今日はお茶の水でライブがあるらしい。ジャズのライブと言えば、終電がなくなる時間までお客さんは帰らない。今日はホテルにでも泊まるしかない、アキラはそう覚悟を決めて元宮のマンションを後にした。

アキラは原宿から山の手線で新宿に出て中央線に乗り換えお茶の水駅に到着した。駅前の通りを右に曲がり、明大通りへ出るとジャズハウスブルーバードがある。表には看板とメニュー表が出ていて、コロナの影響もあってか、基本的にはドリンクしか提供していないようだ。

地下へと階段を下りていくと、ピアノの旋律が微かに聞こえてくる。重いドアを開けると、すでにライブは盛り上がり差し掛かっているようだった。今日は人気ジャズピアニストである藤原涼子の出演日とあって、座れそうな席がなく、カウンターでシャンディガフをオーダーし、そのまま立ち見をすることにした。

ジャズピアニストの藤原涼子は詩音の大学の先輩だが、歳はだいぶ離れている。アキラの4歳年下だから今年で38歳になる。ステージ上、ピアノから放たれる旋律は、本格的なジャズからキャッチーなポップスまで演奏の幅は広い。きっと、ジャズの世界では有名といえども、ジャズ自体が敷居が高い世界だから、ファン層を広げる目的もあるだろう。

アキラはスマホで藤原涼子との相性を調べた。驚くべきことに、運命の人である詩音と同じくらい相性が良いと出る。ステージ上の涼子は、ピンク色のドレスを身にまとい、胸元が大きく開いていて、遠目からでもかなりの巨乳であることが解る。金髪に近いロングの髪の毛を立て巻きにカールさせて、曲が盛り上がる時には、髪を振り乱して観客を誘惑する。涼子が前髪を直すしぐさにつられて目を見合わせる。大きくて垂れている瞳の奥がキラキラと光っていた。たぶん詩音と同じ大学ということは涼子もお嬢様育ちだろう。

ピアノ演奏が終わると涼子がMCをはじめた。

「今日はお休みの中、ご足労頂き、ありがとうございます」

涼子の声はととても甘くて、さっきまで妖艶なピアノを演奏していた人物とは思えなかった。観客の拍手に一礼をし、涼子はMCを続けた。

「次で、今日最後の曲になります。この曲は私の大切な友人に向けて書いたものです。時期外れかもしれませんが心を込めて弾きますので聞いてください」

観客のボルテージはマックスになっていく。涼子は囁くように言う。

「SAKURA」

涼子のコールがかかるとオレンジ色の関節聡明が落ちて場内は静まり返った。しんみりとした伴奏にどこか懐かしいメロディーを奏でていく。アキラはそれがジャズで良く使われるセブンスコードだと解った。曲は転調し、サビまで一気に加速度を上げていく。そして、壮大なサビに差し掛かると、アキラは詩音とはじめて口付けを交わした日を思

いだした。それはまるで、夏に咲く桜のようだった。甘くて少しだけ塩気がピリリと舌を刺激して、なぜかせつなくて、

「世界中の誰よりも愛してる」

って僕が言えば、「このままどこか遠くへ連れ去って欲しい」と彼女は言った。

涼子のピアノは桜の花びらが天高く舞い上がるように、爽やかに、かつ妖艶に、天界と地上を自由に行き来するかのよな心地よい旋律を奏で続ける。

この世で一番楽園に近い島。それは沖縄かもしれないと詩音と観たサンセットの記憶が映画のワンシーンを演じているかのように脳内を過っていく。

観客に感動に耽る余韻を残して、涼子のピアノ演奏は終焉を迎えた。

最後にありがとうございました、と言った涼子のセリフは、湧き上がる歓喜の渦の中、盛大な拍手でかき消されていった。

アキラは涼子が楽屋口に戻るのを確認すると、店のマネージャーに藤原涼子の関係者であることを示すため、詩音と撮った写真を見せた。すると、店のマネージャーは快く涼子の楽屋へと案内してくれた。楽屋でくつろいでいた涼子はアキラを見るなり意外な反応をした。

「ひょっとして橋本章(あきら)君」

涼子の第一声目は、すでに自分のことを知っているかのような口ぶりだった。

「詩音がいつもお世話になっています。橋本と申します」

アキラが短めに挨拶をすると、

「ひょっとして恭子の件で来られたのではないですか？」と涼子は言う。

(恭子? もしかして元宮の隣に映っていた女性のことか)

アキラは元宮の一連の失踪事件の謎を涼子に話した。

そして、元宮の部屋に飾られていた涼子と見知らぬ女性の関係性を聴くためジャズハウスへと足を運んだことも、洗いざらいお話しすると、

「その女性は私の友人の片瀬恭子だと思います」

涼子は髪の毛を耳にかけながらそのように言う。

「元宮には悪いと思いますけど、彼はライブを蹴ってどこかへ失踪してしまいました。彼のご家族からも行方が解ったら知らせて欲しいとお願いされています」

ポケットからメモ調を取り出して、何か心あたりはありませんかと涼子に尋ねる。

「失踪……。やっぱりあのことが関係しているのかしら」

「あのことは? なにか事件でもあったんですか?」

アキラが詳しく聞き出そうとすると、

「アキラ君。ここでは人の目がありますから、場所を移しましょう」

涼子はそう言うと、「着替えるので裏口で待っていてください」と告げて、アキラは裏口へと行くことにした。

涼子を待っている間、アキラはタバコに火をつけて過去の記憶に想いを馳せていた。

詩音との出会いも占いを通じてのものだった。

運命の出会いを信じる詩音は、インターネット上でアキラのことを知り、占いでその相性を調べてみたところ、アキラが運命の人であるという占術結果が出たのであった。

詩音はアキラの電子書籍やブログに全て目を通したと言う。その上で、不自由に生き

てきた自分の身の上と、自由気ままに生きるアキラの生き方を比較して、ますます興味を抱いた。詩音はアキラが所属している占術協会の初級鑑定師になり、アキラとの接近を図った。そして、面接するのを口実にして、アキラと出会った初日目に、共に沖縄県へと旅立ったのだ。そして幾多の困難を乗り越えて、二人は結ばれた。

涼子を待っている間、アキラは遠い昔のことに想いを馳せていて、良い気分になっていたのだが、同時に悪い予感もした。

涼子のいで立ちは詩音にそっくりで、ありのままに飾らないのだけれど、男を虜にする色気に溢れている。こんな時間から涼子からお誘いを受けていること自体、詩音の逆鱗に触れる行為ではある。果たして、無事に元宮失踪のヒントは得られるだろうか。

アキラは時計を見る。21時半を過ぎている。タバコはあと5本しかない。アキラが苛立ちを見せ始めたその時、裏口のドアからカジュアルな服装に着替えた涼子が現れた。

「アキラ君お待たせ」

涼子はベージュ色のパンツに白いブラウス姿で登場した。ステージ上での派手さを隠すように、庶民的な一面をみせている。能ある鷹は爪を隠すというが、有名人のオーラまでは隠しきれていない。

「早かったですね。てっきり一時間くらい待たされるのかと思っちゃいましたよ」

アキラは落ち着いた様子で嘘を吐く。本当は待たされるのは15分が限界だ。

「じゃあさっそくいこうか」

涼子はそう言ってアキラの腕を引っ張って誘導する。

二人の間には沈黙の時間が流れ、涼子が口を開いたのは、タクシー乗り場まで来た時だった。

「アキラ君。今日は朝まで付き合って貰うからね」

「え？」

突然の涼子の誘いにアキラは戸惑う。これは悪い予感がする。なんてことない、男女が一晩を過ごすことになれば性行為の確立はあがるものだ。アキラには欲望に勝てる自信がなかった。

そのあと、タクシーに乗り込み、涼子は五反田へ向かってくださいという。

タクシーは夜の帳(とぼり)を切り裂くように走り抜けていく。涼子の手は細くしなやかにスマホを操作していて、アキラは詩音にはない大人の魅力を感じていた。

五反田駅前の通りで車は停まる。アキラが現金で支払おうとすると涼子が運転手にクレジットカードを差し出した。三井ガーデンホテル五反田店のローソンで買い物をする。

涼子はレモンサワーとからあげを買い、アキラは酒に弱いのでアルコール度数3パーセントのほろ酔いとポテトチップスを買った。

「アキラ君。五反田は私の地元だけど、今日は積もる話もあるからシティホテルに泊まりましょ」

涼子は大胆な女性だ。アキラだって詩音との別れ話がなければ断っていたかもしれない。だが、アキラはその誘いを受けた。抗えない大人の魅力に惹かれつつあった。

シティホテルの受付は15階にあり、大抵の人たちは田舎に帰省しているとあって、すぐにチェックインすることができた。客室はピンからキリまで空室があったが、涼子は一番高いデラックスツインの部屋を選択した。

ロビーラウンジのシックなデザインからして、涼子が成功者の一人だということが解る。

16階には大浴場もあるらしい。このようなホテルは本来、男の方が誘うものだが、涼子や詩音といったその道の成功者ならば、感性の赴くまま自由に行きたい場所へ行ける。そのことがアキラには羨ましかった。

部屋へ入ると、涼子は「大浴場に浸かってきたら？」と言った。

「まだ元宮と恭子さんのことが気になって、風呂に入る気分じゃないです」

アキラが渋ると、

「謎を解き明かす時ってのは大抵、お風呂に入っている時に沸いてくるものよ。それにアキラ君、タバコ吸ったでしょ？ 髪の毛が少し匂うわよ。悪いことは言わないから入ってきて」

「タバコの匂いですか。それは失礼しました。では、お言葉に甘えて入ってきます」

アキラはホテルのアメニティを持って16階まであがる。男湯と書かれたノレンをくぐると、高級ホテルならではの清潔感溢れる脱衣所をみて、蒲田のカプセルホテルとは大違いだなと思い、勝手に笑いがこみ上げてきた。この時間、入浴している人は少ない様子で、脱衣所には一人も客がいない。アキラはおもむろに服を脱ぐと、自分でも汗臭いことが解って、涼子には失礼なことをしてしまったと後悔した。大浴場へと入ると、六本木方面が一望できることにすぐ気が付いた。夜景の綺麗さはやはり都会ならではの楽しみだろう。

アキラはさっと簡単に身体と髪の毛を洗い、風呂へと向かった。夏にはシャワーで済ませることが多く、風呂を沸かして入る習慣がないのだが、ネオンが瞬く都会のビル群を眺めながら入る風呂は格別気持ちよかった。

湯船につかっていると、頭がぼーっとして、身体の隅々がリラックスしていくのが解る。

「詩音いまどこで何をしている？」

アキラは呟いた。

誰もいない大浴場にて、思い返すのは別れたばかりの彼女のこと。

夏の暑い日差しを受けて、沖縄のサンセットビーチで、買って来たばかりのチョココロネを食べた。アイスコーヒは氷が解けかけていて、それをストローでチューチュー吸う詩音の唇は、ちっちゃいアヒルみたいで可愛かった。

そのことを詩音に言うと、

「アキラだって醜いアヒルの子じゃん」

って謎めいたことを言いだす。それってどういうことって尋ねると、

「本当は良家の生まれなのに、それに気づかずに貧乏している」

詩音は悪気なく言うと、

「だって本当に貧乏なんだから仕方ないじゃん」

といて、笑い転げる。

そんな日々は永遠のものと思っていた。詩音とこのままずっと二人でいられると思っていた。もしも、占術が科学だと言えるのなら、詩音こそが運命の伴侶だと疑う余地はなかった。

アキラはふと涼子との相性について思い返す。

涼子は宿曜占術で派手さのある張(ちょう)宿(しゅく)と出る。この張宿の特徴は女性にとって美人星の一つで女大將星でもある。アキラの奎(けい)宿(しゅく)とは最高の相性である。しかし、特筆すべきは、四柱推命で、天地徳合(てんちとくごう)と呼ばれる夫婦としてはこれ以上ない最高の相性であることと、マヤ暦という占術では、アキラが涼子をガイドする役割を持って生まれてきたことが解る。

しかも反対K I Nという真反対の性格や性質を持つとされるが、やはりお互いの学びにとってはなくてはならない存在で、お互いの違いを認め合えば最高の夫婦となれる相性なのだ。だが、涼子は9月20日の誕生日がくれば38歳になる。アキラがもたもたしている間に、涼子は高齢出産をせざるを得ない年齢に差し掛かっているのだ。正直言って詩音と出会う前までは子供はいらないと思っていた。しかし、将来的に小説家として成功をおさめたら、このDNAを後世に残したいと考えるのは普通のことだろう。アキラも同様であった。

涼子のことは詩音の先輩であること以外は何も知らないに等しい。だが、今日のライブを見る限りでは、人気が出る理由も解る気がしている。詩音と涼子、二人の女性にはジャズや同じ大学出身やお嬢様育ちという共通項がある。男という生き物はお嬢様に弱いものである。生まれた時から親がお金持ちであるという後ろ盾があるし、知的教養が高く崇高な精神を持って生きている。そこら辺のキャバ嬢と比べる訳ではないが、やはり人間は学び続けることでしか成長しない。成長なき人生とは貧乏するよりも虚しき人生である。

アキラは湯船に浸かりながら、いろんなことに思索を巡らせていた。少し、のぼせそうになった時、風呂から出て、軽くボディソープで身体を洗いなおし、大浴場を後にした。

部屋まで戻ってくると、部屋の明かりがオレンジ色の間接照明に照らされていて、ジャズのムーディーな曲が流れていた。

ぱっと見た感じでは涼子の姿は見えなかった。

ベッドサイドから涼子の声が聞こえてきて、アキラは目を凝らして眺める。

下着姿の涼子が起き上がると、

「ねえ、おいでよ」

とアキラを誘惑した。

涼子の豊満な胸の膨らみ。透き通るような白い肌。洗い立ての石鹸の薫り。アキラは吸い込まれるように涼子の魔力に憑りつかれた。

「涼子さん。今日会ったばかりでいきなりこんな……………」

「いいの。詩音と違って私は口が固いから」

涼子はアキラのナイトウェアを剥ぎ取ると胸元に顔を埋め乳首をそっと舐めた。

## 10

「すみませんでした……」

アキラは自分の非を涼子に謝った。涼子は何事もなかったかのように、アキラに口づけをねだる。

「誰にだって、そういう気分になれない時はあるもの」

涼子はアキラのペニスをまさぐりながら足を絡めてくる。つるつるして柔らかな感触がアキラの股間を刺激する。が、勃起しないのだ。

涼子はアキラのペニスをくわえて舌で舐めまわす。アキラが完全には絶頂に到れないまま、時間だけが経過していく。涼子はアキラの唇にキスをして「今日はねんねだね」と言った。アキラは堪らなく性欲が脳内を支配しているのに、なぜ射精できないのか情けなく思った。理由はひとつしかない。詩音への執着心だ。

涼子は子供をあやすように、アキラの顔を胸に埋めて「また明日しようね」と言った。

風俗嬢には簡単に身をゆだねる癖に、運命の人だとか、好意を感じている女性の前では、素直になれない。潔癖症なのかもしれない。涼子の大きな胸は、まるで海のようなようだった。

海に抱かれているような壮大なスケールの物語。はじめて冒険にでた幼少期の頃のように、母親の手から離れて、自由を手にした日。少しだけ、心もとなくて。でも、ワクワクを抑えきれなくて、無我夢中になって森の中を駆けずりまわった。

小さくて羽が綺麗な蝶々が空を舞っていた。この蝶々のように地球の重力から解放されて、自由自在に空を舞ってみたい。アキラは夢を見ていた。涼子の胸の中で。

気づけばいつの間にか寝ていた。

うーん、と言って腕を伸ばして起きるアキラ。隣に涼子の姿はなかった。寝ぼけ眼で目をこすりながらベッドから起き上がる。朝の習慣でカーテンを開き窓の外を眺めた。

8月15日、東京都品川区五反田、曇り。34℃とあって湿気が凄い。昨夜は不思議な夢を観た。元宮の代わりに僕が紅白歌合戦に出場して、エアギターを弾いているのだ。なんとも滑稽な自分の姿に朝から笑いがこみ上げてきた。今日こそは元宮失踪の謎を解き明かしたい。アキラはスマホのメモ帳にそう記入する。テーブルには涼子を書いたメモ書きが置かれていた。

アキラ君おはよう。気持ちよさそうに寝ていたので起こしませんでした。私は軽くウォーキングをして、そのまま大浴場で汗を流してきます。ホテルは明日までの宿泊に延長しておきましたので、アキラ君も起きたらゆっくりお風呂でも入ったらどうかしら。

朝食は諦めてレストランでランチでもしましょう。今日こそは恭子のことお話しできると思います。藤原涼子。

アキラは涼子が残したメモ書きを観ながら、風呂へ行く準備をしていた。その前に悪友の竹田に連絡しておく必要があった。アキラはLINE通話で竹田に連絡する。出ない。また性懲りもなく、出ないパチンコ屋で日までも潰しているのだろうと思い、メッセージにすることにした。急遽、用事ができたため、仕事には行けなくなったという趣旨の文面を作り竹田に送信する。都合の良い時だけ、働かせてもらっておいてなんだが、彼の会社の従業員との摩擦を考えるならば、自分なんていない方がよほど気楽に働けるだろうという計算があった。金のことならば心配いらぬ。また、金持ち相手にパワーストーンを売ればよいだけの話だ。

アキラはまた大浴場に行くことにした。空想に耽りたいときは風呂が一番だからだ。

昨晚とは違い、私服を着て16階まで上がる。この時間は宿泊客がチェックアウトする時間だから、風呂は昨日と同じく空いていた。

アキラは脱衣所で服を脱ぐと、右胸あたりにキスマークの跡が残っていることに気づいた。鏡に映るキスマークを見て、何とも言えない気持ちになった。

(またしても、詩音を裏切ってしまった。俺は最低な奴だ)

洗面台に手を置きうなだれる。だが、犯してしまった罪は、もう元には戻らない。なぜ涼子の大人の誘惑に負けてしまったのか。しかも、肝心の時に役に立たなかった。情けなくて、悔しくて、アキラは泣きそうになった。涼子がそろそろ待っているだろうか。アキラはおとなしく風呂に入ることにした。

アキラが湯船に浸かっていると、不思議なことが起きた。子供が一人、元気よく大浴場に入ってきて、後からその子の父親らしき人が声をかけながら入ってきた。

男の子は元気よく風呂に入浴しようとする、父親が身体を洗ってからにしろと注意する。男の子は幼稚園児くらいで、こんなに大きな大浴場に連れて来られて興奮している様子だった。父親は男の子の髪の毛に洗面器で優しくお湯をかけるとシャンプーを泡立ててごしごしと洗うのであった。

アキラはその様子を見て微笑ましい気持ちになった。きっと詩音とだったら、可愛い子供がうまれるはず。しかも詩音はまだ若い。自分よりも13歳も年下なのだから、子供を産むチャンスはたくさん訪れるはず。一方で、涼子はどうだろうか。今年で38歳になる涼子がなぜ結婚という道を選択しなかったのかは解らないが、きっとジャズに人生を捧げる覚悟ができていのだろう。涼子だって素敵で異性が現れれば結婚することも考えているのかもしれない。しかし、出会ったばかりでベッドに誘うような自由奔放な涼子のことだから、恋愛はしても結婚は別だと考えている可能性が高い。占いで運命の人が二人同時に現れたこと。アキラにとって、詩音はもうすでに過去の人ののだろうか。

男の子とその父親が風呂に入ってくる前に、アキラは気を使って風呂を出た。

着替えている間も、幸せな結婚とはどんな感じなのだろうかということに考えを巡らせていた。答えなんか出やしない。ただ、解っているのは、一時的な快樂に負けてセックスするという事はすでにその時点で欲に負けているということだ。



操を守り通した末に結ばれる純愛。そして、セックスからはじまる恋愛。この先、詩音と涼子のどちらを人生の伴侶として選ぶだろうか。女心と秋の空という言葉は、アキラの心模様を映すような言葉だった。

アキラが部屋に戻ってくると、涼子が椅子に座って読書をしていた。

「おかえり」

涼子は本をテーブルに置いていう。昨夜と同じベージュのパンツに白いブラウスを着ていて、化粧もしていないが、それが逆に妖艶なオーラを醸し出している。

「今日も相変わらずお綺麗ですね」

アキラが褒めると涼子は微笑む。「さぁお腹すいたね」と涼子が言って、ルームサービスを頼むことにした。アキラはカップにインスタントコーヒーを淹れてお湯を注ぐ。それを持ってテーブル席の涼子に手渡す。「ありがとう」と涼子がいう。

「アキラ君は恭子のことで私に会いに来てくれたのでしょ？」

アキラは涼子から話を切り出されるまで元宮の件をすっかり忘れていた。恋愛にうつつを抜かしている自分を少しだけ恥じた。元宮失踪の謎。全ては写真に写っていた恭子という女性が握っているのだ。

「恭子は私の親友なんです。元宮君と恭子はお付き合いをされていて、よく私のライブにも遊びに来てくれていました」

「やはり恋人関係だったんですね」

「はい。それで、恭子なんですけど、実はうつ病になっちゃったらしいです」

「うつ病ですか？ それは大変な状況ですね」

「ある日を境にして、連絡が取れなくなって。しばらくして彼女のアパーにも伺ったけれど、どうやら失踪したっぽいんです」

「失踪……それって元宮と同じですね。元宮はうつ病になるようなタイプではないですけど、彼のお父さんは重度のうつ病だったことがあるので、ひょっとしたら遺伝かもしれません。恭子さんがうつ病になったのが事実ならば、自殺を考えていたかもしれませんね」

アキラはそこまで言うとは喉が渇いてコーヒーを飲んだ。涼子は黙って聞いていた。

「アキラ君、わたしは恭子を探しに旅に出たいと思っています。アキラ君も一緒に来てくれませんか？」

アキラは涼子の発言を受けて一瞬黙り込んだ。詩音とお付き合いをはじめたのもこのような流れだったからだ。男女が旅を共にする。そして恋心が芽生えるのは当たり前の話だ。しかも、昨夜は涼子の甘い罠に引っ掛かり情欲をむき出しにさせられてしまった。即決できないアキラに追い打ちをかける様に涼子が言う。

「元宮君の安否が心配ではないのですか？」

「解りました。僕も元宮は命の恩人と思って生きてきました。現在、彼はどこにいて何をしているのか、占術師としてこの謎を解明するためにも全面協力します」

「アキラ君はお仕事の方は都合つくの？」

「はい。大丈夫です。涼子さんは大丈夫ですか？」

「自由気ままに生きれるのがアーティストの特権ですから」

涼子はそう言うと、髪の毛を掻きあげる仕草をした。美人ゆえのサバサバした雰囲気

に男気さえ感じる。アキラは女性的な一面があるので、涼子に言いなりになるしかなかった。

「でも、一体どうやって恭子さんの足取りを探せば良いのか」

アキラがそう言った時、チャイムが鳴ってルームサービスが届いた。涼子がインターフォン越しに下に置いといてくださいと告げると、かしこまりましたとボーイが言う。

「アキラ君朝食を食べながら作戦会議しましょう」

涼子がそう言って玄関口までルームサービスを取りに行った。気が付けばアキラのお腹はぐーぐー鳴っていた。腹が減っては戦はできないのだ。

アキラは恭子の天運鑑定を出そうとして、涼子に恭子の個人情報教えて貰うようお願いをした。片瀬恭子。1984年4月16日生まれ。女性。満38歳。B型。長女。出生地東京都品川区。それを佳子にLINEをして、天運鑑定依頼をかけた。

「ねぇアキラ君。それって何が解る占いな？」

「琉球占術といって、鑑定書には運気が上がる色や数字、方位など77項目に渡って運氣アップのヒントが書かれているよ」

「今度、私のもお願いしてもいいかしら」

「鑑定結果が出るまでに少し時間がかかるので、事前に鑑定情報を教えておいてもらえばやっときます」

「紙に書いておくね」

涼子はそう言って紙に書きだしている間、アキラは涼子と片瀬恭子の相性を調べた。

なんてことはない。最悪の相性だった。この宿曜(しゅくよう)占術(せんじゅつ)という占いは天才僧侶の空海(くうかい)が、唐から持ち帰ってきた仏典に紛れていた占いだ。()()あまり仲良くなれないような関係性とする。もしも、涼子が恭子は親友と言っていることが虚偽(きょぎ)の発言だとすると納得がいく。元宮と涼子の相性は宿曜占術では最高に良い。自分の次に元宮との相性が良いのだとすると、実は恭子とは元宮を奪い合った犬猿の仲なのではないだろうか。そして、相性が良い自分が現れるまで、内心では恭子の失踪なんかには興味がなかった。仮定が正しいとするならば恭子は恋敵だからだ。

(涼子の本音はどこにある?)

アキラは朝食を食べながら、心では涼子に疑いの眼差しを向けていた。

「そういえば、涼子さんのマジカルカラーは赤です」

「マジカルカラーって何？ ラッキーカラーみたいなもの？」

「いいえ、マジカルカラーとラッキーカラーは違います。マジカルカラーは無意識の行動を表していて、その人が持つ周波数を色に例えたものです。だから、マジカルカラーを身に着けていると魔を寄せ付けないので運氣があがります」

「そうなんだ？ 私普段は赤が多いかなあ。ピンクが一番好きだけどね。ピンクや赤を身に着けていると何故だか、守られている気がして、とっても良いことが起きるのよ」

「マジカルカラーは護ってくれる色。ラッキーカラーは勝負するときに幸運をもたらしてくれる色です。ステージ上ではラッキーカラーを身に着けると良いと思います」

「私のラッキーカラーって何色？」

「涼子さんは黒ですね」

「黒かあ。黒はあまり着ないけれどこれからは意識して取り入れる様にしますね」

「あとは、派手さがあるのが涼子さんのウリなので、赤を着ることでより自分らしくなれるってのはあると思います」

そう言ってアキラはトーストを口にする。涼子はオレンジジュースを飲みほっと一をついた。

「恭子の実家って五反田なんですよ。私たち幼馴染なんです」

「幼馴染だったんですね。実は僕も元宮とは幼馴染なんです。恭子さんって写真でしかみてませんが、あまり目立たない感じですよ」

「そうなんです。昔は何も言わなくても勝手に私の後についてきて可愛かったな」

「真面目な人ほど自分を追い込んでうつ病になる。そして、それが悪化すると自殺する恐れもある。それって、だいぶ世の中狂ってる証拠だと思うんです」

「恭子もくそが付くくらい真面目でした」

「でも、恭子さんのような真面目な方が、涼子さんのような華やかな人とお友達関係を続けられたってのは、やはり幼馴染だからですかね」

「恭子と私って真反対の性格持っているのは間違いないです。でも、だからこそ惹かれあうってというか、ほとんど腐れ縁みたいにもおもいますけれど」

「元宮と僕って実はあまり接点ないんです。プライベートでも遊ぶとかないし。彼はサーフィンが趣味だと言えば、僕はサッカーやソフトボールの方が好きだし、何より、僕は泳ぎに自信がありません。母親の故郷が沖縄なんですけど、ただ海辺で綺麗な海を眺めているだけの方が幸せに感じます」

「アキラ君のおかあ様って沖縄なんですね。私も昔から海が大好きで、三浦海岸や湘南など行ってましたけど、沖縄の海をはじめてみた時に心から感動が溢れてきました。ああ、きっとこの島に住む人たちの心が綺麗だから自然と調和してうまく共存してるんだって」涼子がそう言って思い出に浸ろうとしたその時、佳子から天運鑑定書の鑑定書が届いた。PDF形式のファイルを開くと、マジカルカラー白という項目が目に入った。

「涼子さん。恭子さんの天運鑑定が届きました。これで、何かしらのヒントが得られると思います」

アキラは涼子に鑑定書のファイルを見せる。一見何が書いてあるのか解らないと思うだろう。しかし、この暗号のような鑑定書を解説するのが占術師の腕の見せ所である。

「難しすぎて私にはよくわからないわ」

「恭子さんの今年の運気は最悪です。バイオリズムと言って2から8の数字で運気レベルを表しているのですが、今年の8月はもっと最悪の運気です」

「じゃあ、恭子は生きているのかもわからないってことですか」

涼子は少し涙目で尋ねる。アキラは普段、クライアントさんを不安にさせるようなことは言わないようにしている。涼子がここまで落ち込むとは予想していなかった。

「最悪の事態を想定しておくというのも大事かもしれませんが。僕の周囲でも自殺する人が多かった時期がありました。恭子さんのことはまだお会いしていないので、鑑定書でしか解りませんが、最悪の運気の際は、判断を間違えがちです。天輝地といって、運気があがる方位のことなのですが、恭子さんは北とでています。しかし、運気が低迷しているときには、一番行ってはいけない方位である南に行った可能性が高いです。逆に、元宮は運気が絶好調なので、素直に天輝地の南へと行った可能性がある。もしも、二人が一

緒に行動しているならば、南の方角で、海が綺麗な場所に雲隠れしていると思われます」

アキラは占術師として最大限の推理力を発揮した。鑑定書に対する信頼がなせる技だ。涼子はアキラの解説に納得した様子でしきりに頷いて聞いていた。さらにアキラは続ける。

「南と言えば、この時期は沖縄が観光シーズンだし、元宮も沖縄で事業をやっているの  
で沖縄が本命になります。もしも離島にでも行ってたら、その先の足取りを掴むのが困難になります」

「沖縄ってサーフィンでできましたっけ？」

「できる所もありますけど、沖縄の海は浅瀬で沖に出るまでが長いのでサーフィン向きの海とは言えませんね。ただ一つ言えることは、世界でも有数の透明度の高い海ということ  
は間違いありません」

「私も沖縄は思い出深き場所です。個人的には世界一美しい島だと思っています。アキラ君のお母さまもきっと、故郷を離れる時には後ろ髪をひかれる思いだったと思います、  
それだけお父様が魅力的だったのでしょうかね」

「まあうちのお袋は、5人兄弟姉妹の4女ですから一人くらいは東京に嫁がせても良い  
と沖縄のおじいはその考えみたいです。おじいからは一番可愛がられたと聞きますから、  
うちの親父も何かしら人を魅了する何かを持っていたのだと思います」

「素敵ですね。お父様は東京の人かしら」

「ええ。東京都大田区の池上ってところで生まれ育ちました。蒲田の隣町ですね。日蓮宗  
の大本山である池上本門寺があって、日蓮の命日になると盛大に祭りをやるんですけど、  
うちの親父からしたら蒲田は毎日が祭りみたいで羨ましかったみたいです」

「アキラ君のお母さまが青春時代に観た景色、アキラ君と一緒に観たいな」

「え？」

アキラは突然の涼子の告白に戸惑っていた。含み笑いを隠すように涼子はオレンジ  
ジュースをストローで飲んだ。涼子との沖縄旅。果たして詩音との純愛のいきつく先は  
どこで終着駅を迎えるのだろうか。

「沖縄、行きましょ」

「元宮と恭子さんが生きてると解るだけでいいですよ」

アキラはやんわりと涼子の好意をうやむやにした。涼子は目を輝かせていた。

## 11

お盆休み最終日、アキラは羽田空港にいた。この日が終われば仕事が始まる予定だったのだが、涼子と共に沖縄へと旅立つため、悪友の竹田の仕事を急遽キャンセルしていた。

涼子とは羽田空港第1ターミナルの出発ロビーで待ち合わせだった。アキラは亡き兄貴が使用していたサムソナイトのスーツケースを持ち、緑色の肩掛けカバンを持っていた。ユニクロで買った白いハーフパンツに夏らしい紺色のデッキシューズを履き、詩音のマジカルカラーである紺色の半袖シャツで合わせた。胸元には、詩音との沖縄旅行で買って貰ったレイバンのサングラスをぶら下げている。

一目見ただけでも、南国へ旅立つことが解るようなラフな服装で涼子を待っていた。アキラは時計の針を見る。15時を回っている。JAL921出発は15時55分。フライト時刻30分前だというのに、涼子の姿はなかった。

アキラが諦めてコーヒーを飲みに行こうとした矢先、ロビーの入り口近くにひと際目立つ女の姿があった。サングラスをかけていて、真っ赤なドレスを見に纏っている。ワンポイントにハイビスカスの華が飾られた麦藁の帽子をかぶっていて、ジェラルミンのミニスーツケースを引きながらこちらへと歩いてくる。アキラは、(まさか)と思ったが、あの胸の膨らみは間違いない、藤原涼子だ。

涼子はムーディーなまでに露出を多くして、ロビーを歩きかう男性の視線を集めていた。さすがはインスタのフォロワー5万人以上を集める超人気ジャズピアニストだ。まだまだ気候は夏真っ盛りだと言うのに、暦の上ではもう立秋を過ぎていて、キャンボンボール・アダレイの枯葉の名演が聞こえてきそうだった。

「アキラ君お待たせ」

額に少し汗を滲ませて涼子が言う。夜の顔と打って変わって昼の顔は意外と爽やかだ。

「おはようございます。今日は一段と華やかですね」

「そうかな？」

「まあ、音楽家全般に言えることだけど、観られて綺麗になるのはあると思いますよ」

アキラはお世辞ではなく事実を述べた。そのことが嬉しかったのか、涼子は心なしか少し頬を紅潮させている。汗の匂いを防ぐために付けているであろう香水の香りがしていた。

「さあ、行きましょ」

涼子がそう言うと、スーツケースを預けて、搭乗窓口からカードでチェックインした。

アキラたちを乗せたJAL921は予定の時刻から少し遅れて離陸を開始した。ファーストクラスのキャビンアテンダントがアナウンスを流すと、飛行機は雲の上を突きぬけて安定飛行に入った。

涼子はアイスコーヒーを飲み、アキラはお茶をのみながら羽田空港で買ったクッキーをつまむ。詩音を残したまま涼子と二人きりの浪漫飛行は、いったいどんな結末をむかえるだろうか。元宮と恭子さんは無事に生きているのだろうか。

「涼子さんは好きなジャズピアニストとかいますか？」

「うーんいっぱいすぎて絞れないな」

「例えば、子供の頃にピアノはじめたそうですが、影響を受けたピアニストとかいますか？」

「あ〜。だったらいるよ。親がジャズ好きで家にはよくビルエバンスとかキースジャレットがかかってたから、綺麗な旋律のピアニストには影響を受けているかもしれない。後は、アキラ君は知らないかもしれないけど、ジェラルドクレイトンとかジョーイ・カルデッキオなんかは参考にしているよ」

涼子はさすがプロのジャズミュージシャンだけあって、ジャズ好きを自称するアキラが知らないピアニストの名前をあげた。

「へえ〜そうなんですね。知ってるのはビルエバンスくらいかもしれませんが。詩音の影響でジャズを聴いてるつもりになってましたけど、やっぱりプロのチョイスはセンスありますね」

涼子はふと窓際の席から地上の景色に視線を落としては意を決したかのようにアキラに尋ねる。

「詩音とはうまくいっているの？」

アキラは沈黙した。詩音とのことはなんて説明すれば良いか解らなかった。涼子はその隙を逃さなかった。

「うまくいっていないなら、私にもチャンスあるかな」

「え？」

涼子は嬉しそうに窓の外を眺める。アキラは涼子が一瞬みせた乙女な表情に星の王子様に出てくる友達がいないバラの儂さのようなものを感じていた。

フライト中、アキラと涼子は夢を語り合った。その中でアキラがたどり着いた未来は、プロの小説家になって普通に結婚して子供を育てるという平凡な夢だった。

那覇空港に降り立つと、異国に来たかのような錯覚を覚えた。そういえば、ここ沖縄は江戸時代まで琉球王国として約450年栄えた歴史がある。主に中国や東南アジア諸国と貿易して栄華を極めた。焼酎などももともとはシャムから琉球を経由して日本にもたらされたものだ。そして、空手の発祥の地でもある。

涼子は『めんそーれ』と書かれたウエルカムボードを見て、まるで新婚旅行に来たみたいだねと言う。

アキラは頭を抱えて

「涼子さん。僕たちは事件を解決しにきた探偵なんですから」

と言うと、新婚旅行気分の涼子には全く聞こえていない。

「ねえアキラ君。那覇空港のサーターアンダギーって美味しいの？」

涼子は悪びれもなく尋ねる。元宮と恭子の行方など興味ないといった具合だ。  
「那覇空港の2階にある琉球村空港店のサーターアンダギーだったら、揚げたてで美味しいと思いますよ」

「寄ってっていい？」

涼子は観光気分にも浸っているのだろう。アキラはハァと半ばあきれ顔で了承した。到着ロビーからエスカレーターで2階まで登る。DFSの免税店や地元の食材を使ったレストラン、スイーツの専門店などこれから出発する人達で溢れかえっていた。時刻は19時を回っていた。到着の予定よりは気流の影響で遅れたようだった。  
「実は沖縄には数えるくらいしか来たことないんだよねえ」

涼子は片手に長財布を持ち颯爽と歩いていく。

「でも、僕も沖縄は母の故郷ですけど、両手で数えるくらいしか来たことはありませんよ」

「へえ、意外だね」

「まあ、主に法事とかで帰省するだけですからね」

「アキラ君のPOWERSTONE屋さんは沖縄にあるんじゃないの？」

「ええ、沖縄に本店がありますけど、インターネット店がメインなので、沖縄での研修期間が終われば東京にいても仕事できますから」

サーターアンダギーのお店にたどり着くと、涼子はアキラの分まで含めて4個も購入した。揚げたてのサーターアンダギーは、すぐにぺろりと2個くらい食べてしまえるくらい、味に癖がなくて、子供の頃に駄菓子屋で買った4個入のミニドーナツみたいに、シンプルで優しい味付けなのが特徴的だ。

「さて、恭子の行方を捜しに行かなきゃね」

涼子がそう言うと、到着ロビーまで戻り、スーツケースを受け取る。とりあえず宿を確保するため、タクシーで国際通りまで出ることにした。

詩音と沖縄に来た時は、ハイアットリージェンシーという5つ星ホテルのスイートルームだったが、涼子とだったらビジネスホテルで別々の部屋をとるということも考えられた。

タクシーで移動している最中に、スマホでホテルの空き部屋を探したが、この観光シーズン中の沖縄にはホテルはほぼ満室で、コンフォートホテルというビジネスホテルならば二人部屋が空いていることが解った。

「アキラ君。申し訳ないけど、私と同じ部屋でいいかしら」

「別に構いませんよ」

「じゃあコンフォートホテルで2人部屋を予約するね」

涼子はそう言って、タクシーの運転手にコンフォートホテルの近くで降ろしてくださいと告げる。現代社会では、スマホで簡単にホテルの予約を取ることができる。恵まれた時代に生きているのかもしれない。

車は国道331号線をひた走る。車内はクーラーが効いていて涼しいが、外に出ればTシャツ一枚でも汗だくになりそうなくらい、真夏の沖縄は日差しが強い。

県庁前までたどり着くと、タクシーを降りて、運転手がトランクに入れたスーツケースを降ろしてくれた。

コンフォートホテルまで歩いている間、焼けるような太陽の日差しが眩しくて、アキ

ラは胸元にぶら下げていたサングラスをかけた。

夕方の国際通りは観光客で賑わっている。皆それぞれに異国情緒あふれる琉球王国の歴史を感じながら、本土では滅多に見かけない珍しい沖縄土産を物色したり、カップに盛られたアイスを食べながら歩いたり、中国語や韓国語も入り混じって、あらためてここは琉球王国なのだと再認識する。

コンビニの向かいにホテルを見つけると、小腹が空いたねと涼子が言うので、コンビニで買い物をすることにした。

焼けつくような外の暑さに比べて、店内は空調が効いていて天国だ。涼子はスパムおにぎりや緑茶をかごにいれると、アキラはコカ・コーラとタバコだけを買った。アキラにととって、夕暮れの時間とは晩御飯を美味しく食べるためのカロリー消費の時間なのだ。タバコとコーヒーさえあれば昼飯すら食べなくても良いとアキラはそう思っている。

コンフォートホテルの受付でチェックインを済ませて、一階の奥にある食堂でウエルカムドリンクを飲んだ。涼子はそれを見ているだけだった。もう37歳だから、顔がむくむくの嫌って水分はあまり摂らないようだ。

しかしながら、真夏の沖縄の殺人級の暑さに耐えかねて、ペットボトルのお茶は常に持っておきたいようである。

涼子のマジカルナンバーは6。これは深層心理と呼ばれる鑑定項目から導き出される運気があがるナンバーなのだ。偶然にも二人が泊まる部屋は、涼子のマジカルナンバーである6階だった。運気が上がっている証拠だろう。

部屋に入った途端に涼子がスーツケースからミニ鍵盤を取り出して、指慣らしを始めた。ピアニストという人種は一日でも練習をさぼるとそわそわして落ち着かないようだ。

アキラは書きかけの小説が気になっていたが、元宮と恭子失踪の謎を突き止めるため、元宮が経営するコーヒーショップの所在地を調べていた。アメリカンビレッジにあることは知っていたが、他にも、サーフ系ブランドのアンダーサーバーを務めていたりするから、ショップ店員に直接聞けば、足取りがつかめるかもしれない。

元宮のマジカルカラーは青。幼少期からサーフィンを嗜んできた彼だからこそ、マジカルカラー青が持つキーワードの海とは切っても切れない関係にある。一方で、運気が最悪な時に一番行ってはいけない方位に来てしまったと予測される片瀬恭子は、マジカルカラーが白だ。マジカルカラー白は置かれている環境に影響されやすい。涼子の説明によると恭子は看護師をやっていて、ボランティアで保護猫の里親を探すNPO法人のお手伝いをしていらしい。看護師資格を取るくらいだから根が真面目で、患者の死に対しても真摯に向き合ってきたに違いない。しかも、恭子の父親は早くに他界しており、片親で育てられたという。シングルマザーの経済事情はよく解らないが、涼子と同じ中高一貫教育の同級生だったことを思えば、一般的な家庭よりは裕福な暮らしをしていたはずだ。

アキラはアイデアが煮詰まって、タバコが吸いたくなかった。部屋は禁煙ルームだが、風呂場に行って換気扇を回し、タバコに火をつけた。

こうして、タバコを吹かしている間は、禅の瞑想みたいに無の境地になれる。その溢れ出るアイデアや回想からヒントを得て、小説の執筆に活かしているのだ。

アキラはゆっくりと瞳を閉じていく。元宮と恭子が同じ時期に失踪した。二人が行動を



共にしているのはほぼ間違いないように思えた。しかし、恭子がうつ病を患っているかもしれないことを思えば、先に恭子が失踪して、恋人である元宮が恭子の後を追いかけた可能性だってある。謎はかなり複雑に思えた。今のところ占術というツールを使って沖縄にいる可能性だけを頼りに、涼子と謎を解きに来た。小説家志望のアキラにとって、これがはじめてのミステリーである。

ふと元宮が歌っている歌詞を思い出す。食べる分それ以上、身に着けるものそれ以上、渴きを潤すのに一体何が必要？

アキラは換気扇の真下において、天井を見あげた。ドレミファソラシドの音階が螺旋を描くように、自由自在に舞っていく。元宮が創る音楽は数学的であり、仏法哲学でもある。自殺を考えるような奴ではないことならば、アキラが一番よく知っている。元宮は小学校の時、目立ちすぎたがゆえに、軽いイジメにあっていた。音楽家になって有名になってからも、彼のネームバリューを悪用する奴がいた。女に彼の友達であることを話せば簡単に興味を持って付いてくる。性欲盛んな若い頃に成功したが故、彼は利用され続けて、心に深い傷を負ったのだ。

元宮はなぜ涼子ではなく片瀬恭子に心惹かれたのだろうか。ジャンルは違えども、同じ音楽家同士ならば、元宮と涼子がくつつくのが自然な流れではないだろうか。

アキラはタバコを吸いきって、風呂場から出る。ビジネスホテルとはいえ、勝手にタバコを吸うような習慣はできる事ならば避けたい。しかし、ニコチン切れの症状を埋めるために、世間一般のルールを破ることは、ポイ捨てや路上喫煙することを除いて、換気扇の下ならば壁に汚れがつかないから大丈夫だという長年の経験則により正当化している。

涼子は狭い室内でなるべく動かないように椅子に座って読書をしている。アキラはベッドに横たわり、片手を顔に乗せて涼子のことを眺めていた。

音楽家という人種は不思議な生き物だ。売れない時期から苦楽を共にしたバンド仲間ならば、勝手に男女が結ばれるというケースもあり得るが、異なるジャンルのアーティスト同士が結ばれるというのはあまりないのかもしれない。

それに涼子はマジカルカラーが赤で派手好みだ。パーソナルは詩音と同じ匠(たくみ)を持っている。このパーソナルという鑑定項目は、お仕事の適正や性格を見ることに長けている。詩音と涼子は、同じジャズシンガーで同じパーソナルを持っている。違う点と言えば、マジカルカラーや深層心理が解るマジカルナンバーだけだ。

マジカルカラー藍(らん)で、マジカルナンバー7の詩音は、心の奥底で目立ちたいという願望を持ち、友人や他者からはお洒落でロマンティストに見えている。数値化すると777というぞろ目のナンバーになることが特徴的で、ラッキーナンバー1という数字からは、異性問題に対して潔癖であることが解っている。涼子のラッキーナンバーは9だ。この数字は、異性関係で特に性にたいして自由奔放で、セックスに対するハードルが低いことを表している。一言でいえば、性欲盛んだということだ。

アキラはベッドに大の字になり、これまでの経緯を簡単にイメージしてみた。そもそも、悪友の竹田と地元の蒲田で酒を飲んだところから話がおかしな方向に展開していった。アキラと竹田の相性は壊し壊される安壊(あんかい)という関係性だということも解っていた。しかし、竹田の方から誘われれば長年の付き合いからして断れるわけもない。その結果、欲に負けて風俗に行ってしまった。そして、そのことが詩音にばれ

て一方的に別れ話を切りだされて出て行ってしまった。

詩音との関係性はこの世に二つとないほどの愛し愛される運命の女性だったはずだ。しかし、詩音の先輩である藤原涼子とも、天地徳合という夫婦になるには最良の相性と出てしまった。涼子とは流れに身を任せて、身体の関係の一步手前まできてしまった。詩音のことを大切に思えば思うほど、出会って3日目でヴァージンを奪ってしまった自分自身の無責任な行動に嫌気が差す。それでいて、自分は風俗遊びに興じているのだというのだから、もうホームレスなんかよりもよっぽど、人間として最低だと思う。

ホームレスだって、莫大な借金を抱えてにっちもさっちもいなくなってしまった人間が、借金取りに居場所を知られることを恐れて、福祉にも頼れないほど追い込まれた人間が陥るものだと勝手に推測している。それでも、死ぬに死ねず、ぼろぼろで洗濯もしていない衣服を纏い、ごみ収集の日に空き缶を集めて、それを業者に買い取ってもらい、幾ばくかの金を手にして、寒さをしのぐためワンカップの酒を買って酔っばらう。少しでも教養がある人間だったら、素直に福祉の力を借りれば良いのにといいホームレスの気持ちなど理解できない。好きでホームレスをやっているとしか思えないからだ。

アキラは瞳を閉じてさらに想いを巡らす。

詩音とはじめて帝国ホテルで会った時のこと。

ディーゼルのジープにヒステリックグラマーのロングTシャツ。その上に、紺色のジャケットを羽織っていて、一目みた瞬間に、この世のものとは思えないほどの。可愛らしさと奇麗の良いところ取りした顔を見て、恋の予感が走った。

無理やりハイヤーに押し込められて、沖縄へと旅立つ時、  
「アキラ君。悪いけれど、沖縄では婚約者という設定にしたいの」  
と言って、それからはアキラと呼び捨てにされたこと。

琉球入り3日目の昼下がり。マジカルカラー緑の占術師絢(あや)香(か)と詩音が喧嘩越しに言い合いになったこと。

「年収一千万円くらいで威張らないで下さい。私は資産の配当金だけで悠に億を稼いでますから」と詩音が語気を強めて言うと、

絢香は「仕事の邪魔だから帰って下さい」とやんわり白旗をあげた。

女性関係で秘密を持ちがちな自分のことだから、いつかこんな日が来るのではないかと心のどこかで感じていた。

熱心な仏教徒でありながら、自殺未遂を犯し、キリスト教への憧れを抱きながら周囲を欺いて生きてきたこと。裏切るということは、一体どのようなことなのだろうか。

そして、強く仲間の幸せを願えば願うほど、心が離れていく。

アキラは回想した後、たまらなくせつなくなっていて、勢いよくベッドから身を起こした。涼子がそれに気づき、こちらを眺めながら微笑んでいる。心の全てを見透かされているような不思議な気持ちになる。

「さて、アキラ君。そろそろ恭子の行方を捜しにいきましょうか」  
「そうですね。でも、ちょっと待っていて下さい。占術のメンターに詳しいことを占って貰ってますから」

「そうなの？」

「あてずっぽうで探すよりは、占術が科学であることを信じたいのです」

「占術が科学？」

「はい。科学とは再現性の高さだと教えられました。誰がやっても同じ結果が出ることを科学だと言うのならば、占術は未来さえも教えてくれている。そう信じているのです」

「解ったわ。アキラ君がそこまで言うのならば、私も信じる気になってきたわ」

「ありがとうございます」

「それで、いつごろ鑑定結果が出るの？」

「遅くても今夜中には結果がでます。それまでは、自由行動でも良いですよ」

「それならば、せっかく沖縄に来たんだし、少し観光しましょうよ」

「観光ですか？ 幼馴染が大変な状況かもしれないのによくそんな気分になれますね」

「アキラ君。私も神様の教えを少しだけかじってるから解る。所詮この世は、神々が創り上げた演劇よ。生きていることにだって、死ぬことにだって何の意味もないもの」

「それって、なるようにしかならないってことですか？」

「アキラ君は男だから解らないのよ」

「え？」

「そもそも、出会いのタイミングは選べないもの。女は結婚すれば旦那さんの運命によって幸せか不幸化が左右されるわ。でも、その出会いだって自分で選んでいるようで、実は神様が決めている。女は受け身っていうけど本当の事よ。素敵な人と出会えれば幸せだけど、実際に生活を共にしてみればはじめて解ることもある」

「そのことが元宮たちを心配しないことと何か関係あるんですか？」

「アキラ君。所詮はね、恭子も元宮君もいい大人だもの。こんなこと言ったら嫌われちゃうかもしれないけど、仮に死んでいたとしても、私たちには何の罪もないってことだけは言っておきたいわ。私だって恭子のことが心配でなんの根拠もなく沖縄まで追いかけて来たことは真実よ。けれどもね、人が死にたいっていう気持ちって、もしその気持ちが本当だったら、誰にも止められないと思うのよ」

アキラは涼子の言うことに特別な異論はなかった。詩音との最後のやりとりの中で、自分自身が犯した罪と元宮たちが死んでいるかもしれないという憶測とが勝手に脳内を混乱させているのだ。

「じゃあ。恭子さんの身を案じて沖縄まで来たのは虚栄だったってことですか？」

「アキラ君。小説家志望なら日本語は正しく使おうね。虚栄ってのは見栄やプライドって意味だよ。私はプライドが高く見えるようだけど、虚栄心から幼馴染を探すなんてあり得ない。それよりかは、単純に好奇心を持っただけよ」

「好奇心？」

「あなたにね」

涼子はそのままで言うと、不意にアキラの首を掴み引き寄せてキスをした。アキラにとってそのキスは自分が吸ったタバコのフレーバーがして、ほろ苦いものだった。

## 12

その夜、アキラと涼子は国際通りにあるイタリアンレストランにいた。ジンジャーエールと前菜をオーダーして、ジャズが流れる薄暗い店内は、南国沖縄で恋に落ちたであろうカップルたちで賑わっていた。

「涼子さん。さきほど、元宮のお母さんからメールが届きました」

「へえ。なんてメッセージきたの？」

「無理言って探してもらって申し訳ないけど、もう彼のことは探さなくて良いです。みたいな内容でした」

「じゃあお母さまのところには無事に連絡が来たのかしら？」

「いや、たぶん気を使っているのだと思います。まあ元宮のことだったらはじめから心配してませんが、恭子さんのことは気になりますからね」

「恭子は……そうだね、ちょっとやばいかもしれない」

「だからと言って、ここまで来たのだから引き下がるのも気が引けます」

「恭子は片親が亡くなっていて、家もそんなに裕福じゃないのよ」

「そうなんですか？ 涼子さんと同じ学校だと言ってたからてっきり裕福な家系の方かと思っていました」

「恭子の母親って水商売の人なの」

「そうだったんですね」

「だから、スポンサー次第の波乱万丈な人生だよ」

「人生色々ですものね。身体を売ってないだけまだマシかと思いますよ」

「まあね」

「おかあさまが人気商売だったら、恭子さんが控えめな美人なのも頷けます」

「恭子はどちらかという可愛い系だけどね」

「元宮って品がある女性がタイプなんですよ」

「恭子はいちおうお嬢様学校の出身だからね。それに看護師だし趣味も上品だよ」

「でも不思議だなあ」

「何が？」

「恭子さんとはまだお会いしたこともないのに、なんとなく元宮が惚れた理由が解る気がするんです」

「ひょっとしてアキラ君も恭子みたいなのがタイプ？」

「いえ、タイプとかそういうのじゃなくて、元宮と僕って誕生日が一日違いなんです。しかも、実家が近かったから小学生の頃は毎日通学を共にしてたし。だからという訳でもないんですけど、趣味が真反対だから滅多に遊ばないんですけど、心で繋がっている。そんな気がするんです」

「そっかぁ。それってソウルメイトってやつなのかな」

「占術のメンターに言わせればそうなります」

「私と恭子はどうかな？」

「ソウルメイトだと思いますよ。ただ、強烈に惹かれあう関係でありながら、最後には離れていくような不思議なめぐり合わせだと思っています」

「確かにね。初対面の時も強烈なインパクトあったなぁ。だいたい喧嘩もしたしね」

「それでも、離れられない。腐れ縁と言えは聞こえは悪いですけど、涼子さんだってこれから繁忙期って時に恭子さんが失踪して探しにいく羽目になりましたからね」

「恭子は同じ年だけど、私からしたら妹って感じなのよ。放っておけないというか、目を離すと悪い人について行ってしまうんじゃないかって心配になるの」

「まぁ、パワーバランス的にもそうでしょうね。涼子さんは姉御肌みたいな一面がありますから、天性のリーダー気質を持って生まれてきてますよ」

アキラはそこまで話すと、そろそろメインディッシュをオーダーしようと言って、

メインディッシュを決めることにした。丸鶏の  
悪魔焼きと石垣島胡椒のカチョ・エ・ペペというパスタ料理をオーダーした。

「アキラ君タバコは大丈夫？」

涼子が気を使って尋ねる。アキラは話に夢中になっていてニコチン切れの症状を忘れていた。

「お気遣いありがとうございます。食事の時は我慢できますから」

「アキラ君って顔に似合わずヘビースモーカーよね。ホテルの部屋でも吸ってたし」

「風呂場で吸ったのバレてましたか。申し訳ないです。タバコはいずれ辞めるつもりでいるのですが、どうしても小説を執筆すると筆が進まなくて、タバコに逃げちゃうんです。だから、締め切り前にはタバコの本数ばかり増えて喉も痛くて大変ですよ」

「詩音と付き合ってるならば、ボーカリストだからタバコは嫌がるんじゃない？」

「それがそうでもないですよ。詩音はタバコの香りが好きみたいでして、酒も弱いくせにウイスキーの薫りやタバコの匂いは昭和を感じるから好きって言ってました」

「あ。今は詩音のことは禁句だったかな」

「いえ、もう半分終わったような関係ですから……」

アキラがそう言っていると、ウェイトレスがジンジャエールのお替りとパスタを運びにやってきた。丸鶏はもう少し時間がかかるとのことだったので、食後にコーヒーとティラミスを追加オーダーした。

「さぁ。美味しいもの食べて嫌なことは忘れよ」

涼子は不思議な女性だ。ステージ上では華やかに振舞っているというのに、男の前では母親のような母性で優しく包み込む。それはアキラにとって、はじめて体感することであった。大抵の場合はアキラの方が面倒役で友人やお客さんの悩みに耳を傾けてアドバイスをする。面倒を観るという役割において、涼子だって恭子のような看護師に向いているのではないかと思う。

元宮は若くして音楽の世界で成功した。しかし、意外に寂しがり屋な彼のことを看護師である恭子が献身的にお世話をしている様子が浮かんでくる。人は誰しも弱っている時に異性に優しくされたら、見た目以上に素敵に見えるものである。

『心』

全ては相手を思いやる真心から始まるのだ。

元宮のママさんから探さなくて良いと言われてしまったが、なんの根拠もなく沖縄に来てしまった以上、最低でも元宮の経営する店を見て回ろうと思う。それは元宮のためではない、彼の恋人である恭子のためだけでもない、言葉にはならない神秘的な何か二人を呼んでいる気がするのだ。強いご縁があって思いもよらない場所で再会できる気がしている。元宮と恋人が失踪したというのは勘違いだったかもしれない。それでも、今は詩音の事を忘れて、涼子との旅を楽しみたい。

アキラはいつの間にか涼子の愛の中で、愛に溺れかけていた。

大財閥の令嬢である詩音のヒモ男に成り下がり、飼い犬が主人に嘔みつくような形で二人は別れた。大切に思えば思うほど、暗く長いトンネルの中を走るように、走っても走っても、未だ出口さえみえない。小説家になるという夢なんか見るもんじゃない。ましてや、その世界で有名になって億を稼ごうなんて馬鹿げている。

アキラは目の前でパスタを美味しく上品に食べる涼子との出会いの意味を考えていた。ふと涼子がそれに気づき、「食欲ないの？」と尋ねてくる。我に返ったアキラは丸鶏の美味しく匂いにつられて、パスタを取り皿に盛り、ラーメンを啜るように食べ始めた。自分でも行儀が悪いことは解っている。ズズズと音を出して食べることは世界的には最低の食事マナーだ。涼子は目を細めながら見ている。まるで、最愛の我が子がはじめて離乳食を口にした時のように。涼子には子供を産む願望はないのかもしれないが、この美簿と才気溢れるDNAを後世に残せないのはもったいないと、みな思うのであろう。

食事を済ませて店を出ると、そういえば、昨日は終戦記念日だったなとふと思い出していた。アキラの地元大田区では毎年終戦記念日に多摩川で花火大会が開催される。でも、今年もコロナの影響で中止だろうなと思い、もうここ数年間くらいは悪天候やコロナの影響で花火大会は中止となり、最後に花火を観たのはいつだったかも思いだせないほど、遠い過去の話に思えるのである。

那覇の国際通りには無数のパワーストーン屋が軒を構えていて、占いなどの看板も多くみかける。沖縄には本物のパワーストーンが集まってくる。それはなぜかという、世界中のパワーストーン原石の9割以上は中国に運ばれてくる。中国にはパワーストーンを加工する工場が数えきれないほどある。中国と縁が深い琉球王国時は貿易で栄えた歴史が長いので、パワーストーンを販売するお店がたくさんある。なぜ中国が販売しないのかという、古来中国は貿易をして金を儲けるのは悪いことだという考え方が主流だったためだ。中国では安値で売っている物を他の国へ持っていけば高く売れる。今でこそ当たり前の考え方は、中国では卑しいとされていた。そのため、中国と縁が深い沖縄は今でも、中国人観光客や本土の日本人相手に沖縄土産としてパワーストーンを売って経済を回している。そもそも、琉球王朝時代には、神の声が聴ける女性の方が国王よりも偉いとされていた。なぜならば、神の声をもとにして国作りをしてきた歴史があるからだ。

アキラは先ほどから通り沿いにあるパワーストーン屋が気になって仕方なくて、つい

に涼子に声をかけて、パワーストーン屋を物色することにした。

ピンからキリまであるパワーストーンを目にする。東京では絶対に買えないクオリティーの高いパワーストーンが低価格で売られている。

店先には色とりどりのパワーストーンのブレスレットが飾られていて、通りゆく人たちの視線を集めている。店の奥にはショウケースに入っている高級な天然石が眩いくらいに光り輝いている。きっと数十万以上するであろう。

先ほどから店先で外国人相手に占いをしている女性店員とのやりとりが店の奥まで聞こえてきて、語学堪能な涼子が、アメリカ人も買いにくるのねと言って、簡単に通訳してくれた。

涼子が言うには、アメリカ本土から沖縄に観光に来たアメリカ人で、自分の誕生石は何かと店員に尋ねたところ、12月生まれのいて座だからターコイズが良いと話しているという。アキラの琉球占術鑑定をもとにしたパワーストーンセレクトからしたら、子供騙しのような話だ。乙女座だったら、自分も元宮も涼子も詩音だって同じ乙女座だからだ。

しかし、置いてあるパワーストーンは東京では滅多に見かけない希少価値が高いストーンが置いてある。まあ、沖縄だからこそ色んなパワーストーン屋を巡り巡ってたった一つのパートナーストーンに出会える瞬間こそがアキラにとって沖縄旅の一番の楽しみなのだ。

涼子はピアニストだからか、あまりパワーストーンには関心が向かないと思っていた。アキラが血眼になりながら、必死にパワーストーンを物色していると、涼子は翡翠(ひすい)を手にとって腕に着けて鏡で覗きだした。アキラがそれに気づくと、

「ねぇアキラ君。この石って翡翠かなあ？」と尋ねてきたので

「たぶん国産の天然の翡翠だと思います」

とアキラは産地までを言い当ててみせた。

「アキラ君のカラーって緑でしょ？」

「マジカルカラーが緑でラッキーカラーが赤です」

「私これ買おうかなあ」

「え？ 涼子さんは赤と黒ですよ」

「いや、わたし最近、緑が気になって仕方ないのよ」

「そうなんですね。悪くないと思いますよ。ピアニストだから直感が冴えた時に選んだ物は縁起が良いと思います」

「そうだよね」

「でも、高いですよ。かなりクオリティ高い翡翠なので、東京だと数十万以上しますよ」

「お金のことならいいのよ。人生一度キリですもの。本当に自分が気に入ったものなら、生涯大切にするし」

「そうですか。でも、本当にその通りですよね」

涼子が店の奥で会計を済ませている間、アキラは翡翠の価格を覗いて衝撃を受けた。本当に50万円以上する翡翠だったからだ。大財閥のご令嬢である詩音ですら30万円弱のスーパーセブンをパートナーストーンに選択した。幾ら人気ジャズシンガーとはいえ、衝動買いにしては高額すぎる。

涼子はカードを差し出し「腕に着けて帰るので袋は要らないです」と店員に告げた。

アキラは詩音や涼子との経済格差に愕然としていた。しかし、アキラだってパワーストーンに数百万円も出資している。彼は貧乏だなんて言いながらも好きな物のためならばちゃんと貯金をして買えるだけの経済力があることに自分自身では気づいていなかった。

国際通りを県庁前まで歩いて帰る最中も涼子は嬉しさを嘯みしめるような表情を浮かべていた。彼女はマジカルカラーが赤だから思っていることが表面に出てきて解りやすい。一方で、アキラはマジカルカラーが緑だから、思っていることが表面には出てこない。他者からしたら何を考えているのかがいまいち解りにくいと言われる。

マジカルカラーは護ってくれる色であると同時に無意識の行動を表す。人間には必ず個人特有の周波数を持っている。色も波動であるために周波数で表すことができる。ゆえに、その人がもともと持っている周波数から色を算出して、マジカルカラーとラッキーカラーを導き出し、特に普段は魔よけの意味でマジカルカラーを衣服に見に纏うことで簡単に運氣があがる仕組みになっている。面接などの勝負時にはラッキーカラーを見に纏うことで幸運がもたらされる。他の色は着てはいけないとまでは言わないが、誰にだって、いちばん似合う色というものは必ずあるものであり、それは決して多くはない。

例えば、モノトーンは誰にでも似合う前提として、そこに黄色であったり、オレンジであったり、紫など、個人特有のカラーがあることを一般人は知らない。アニメキャラクターだって基本的には、同じ色の服しか着ていないのだ。

県庁前まで戻ってくると、インスタントコーヒーを買うため、ファミリーマートに立ち寄ることにした。

アキラはUCCのインスタントコーヒーとミルクを籠に入れる。ついでに紅茶でも飲むかもしれないと、スティックタイプのミルクティーを買うことにした。せっかく沖縄に来たのだからここでしかないものを探していた。スパムおにぎりやミミガーや沖縄そばのカップ麺など、籠はすぐにいっぱいになった。涼子は最後にファミチキとレモンサワーを購入した。

店を出ると、夜風が吹いて涼しくて気持ちいい。『真夏の夜の夢』とは松任谷由美の代表曲で彼女自身長いキャリアの中で一番売れたシングルだが、涼子が魅せるアラビアの夜のような熱帯夜にはBGMとして真夏の夜の夢が流れてきそうだった。もっとも、昭和や平成の歌謡曲が若い世代にまで愛される理由というのも、昔はスマホやインターネットがなかった時代だったので、本物のアーティストだけがテレビの前で歌うことを許されていたからだろう。本物というのは、時代に翻弄されずに生き残ることをいう。

アキラは思う。元宮だって間違いなく本物のアーティストだ。彼が歌う詩(リリック)には、間違いなく仏法思想が反映されている。困っている人を救いたいというのは彼のライフワークそのものなのだ。だから、ダブテックの二人が歌う曲は、リスナーの深い心の闇の部分までを太陽の日差しで優しく照らすパワーが込められている。

涼子といる時間は、詩音とはじめて会った時のような甘い時間ではないが、前世からの深い繋がりのようなものを感じる。とめどなく優しく、春の唄みたいにはほのぼのしていて、一緒にいることがまるで苦にならない。前世では夫婦だったのかもしれない。そう錯覚させるほど、運命的な何かを感じるし、恋愛のトキメキ以上の幸福を与えてくれ



る。 お互いアラフォー世代とあって、大人の付き合いというのが非常に楽ではある。

詩音は13歳年下の29歳。子供を産むには最適な年齢に差し掛かって、それでもまだ、子供のような考え方が抜け切れていない年ごろではある。

涼子だったら浮気の一つや二つくらい、過去の過ち、一時の気の迷いとして寛大に許してくれそうだ。

コンフォートホテルの6階まで帰ってくると、狭い部屋の中で、お互いに夢を語り合った。涼子は世界的なジャズピアニストになるために、英語力を磨くことを目標にかかげ、アキラはプロの小説家として一円でも多くお金を稼ぐことと世界一の小説家になりたいという中二病みたいな壮大な夢を語った。

ふとりラックスしきったアキラが良いアイデアを思い付いた。GPS機能を使えば、恭子の居場所が解るのではないだろうかという子供じみた発想だった。

しかし、涼子は「それナイスアイデア」と言って馬鹿にはしなかった。

「しかし、ハッカーじゃあるまいし、どうやってGPS機能をハッキングすれば良いのか」

アキラはパソコンには詳しくない。スマホで調べてもそんな都合よく見つからないだろう。もしもGPS機能が簡単に使えて居場所が解るのならば、この世の浮気や不倫など、簡単にバレてしまうからだ。

「アキラ君はインターネットやってるくせに最近のGPS機能を使っての浮気調査の事情を知らないのね。今時のスマホなんてプロならば簡単にハッキングできるのよ」

「でも、仮にスマホをハッキングしたとして、恭子さんがスマホの電源を落としていたら追跡できないじゃないですか」

「大丈夫。任せといて。探偵事務所で働いている大学時代の友人がいるから」

「そんな簡単にいきますかね」

「まあちょっと、法に触れるけどうまくやってくれるでしょ。そんなことよりもなんで今までその事実気づかなかったのかってことが問題よね」

「灯台下暗し……まさか冗談で言ったことが実現できる世界に生きていたなんて」

「テクノロジーが創った光と影。まあ、自殺考えるような病気になったかもしれないのに社会の方がまるで恭子に対して無関心みたいでさ。頭にくるから意地でも居場所突き止めてやる」

涼子はそう言うと、電話で大事な話があるから30分ほど外に出てくださいと言って、紙とペンを用意して、カバンからボイスレコーダーを取り出した。アキラはその様子が少し怖く感じて、タバコとスマホ財布をハーフパンツのポケットに突っ込んで、万が一のため、サマーカーディガンを腰に巻き付けて外に出た。

## 13

真夜中の国際通りは人通りこそ少ないものの相変わらず賑やかで、主に声掛けのアルバイトと酔っばらって歩く観光客とのやり取りの声や路上アーティスト達のパフォーマンスする音が混じりあって別世界を作り上げていた。

海風が吹くと少しだけ肌寒く感じるが、サマーカーディガンで羽織るほどではない。

先ほどの涼子の小悪魔のような笑み。それを思い返しては身震いする。まさか、ハリウッド映画じゃあるまいし、他人のスマホをハッキングすることになるなんて思いも寄らなかった。こんな殺伐とした時代に僕らは生まれてきて、老いて、病に倒れて死んでいく。

今でも心のひだに残る消せない過去の過ちと実の兄の突然死。脳内に悪い予感が走る。

『自殺……』

人はこの世の中を楽しむためにうまれてきたのだとお釈迦様は言うけれど、それならば人はなぜ尊い命を自らの手で断ち切る。

アキラは発狂したい衝動に駆られた。サンドバッグがあれば思いっきり殴りたい。この衝動性がある限り、僕は看護師にもなれなければ介護士にもなれない。人の面倒を顧るお仕事はできないんだ。だから、僕はこの内なる衝動性を昇華させるため、文章での芸術作品に打ち込んでいるんだ。でも、それがいったい世の中のためになっているのだろうか。

答えなんてない。この世の中には答えのない問題だらけだもの。でも、一つ確かなことは生きているもの必ず死が訪れるということだけだ。

人生百年時代に生きているというのに、ましてや日本という世界第三位の経済大国に生まれただけで衣食住を約束されているというのに、人はなぜ自死を選ぶ。

きっとプライドが高すぎるんだ。いや、違う。本物のプライドがあるならば生きてこそ、生きて生きて生き抜いてこそその人生じゃないか。

負けたんだ。僕も兄貴も、何もかも。全ては魔という一瞬ですべてを破壊する悪霊にそそのかされて。

アキラはたまらず、近くにあった自動販売機を殴りつけた。通りゆく人たちは、一瞬驚きの表情を浮かべたが何事もなかったかのように通りすぎていく。

ざまぁみやがれ。俺は生きている。アキラの右手から血のようなものが流れていった。

アキラはその場に座り込んだ。傍からみれば単なる酔っ払いだろう。そうアキラは酔っばらっているのだ。その症状は時折、彼の精神を蝕む。それゆえに、人から怖がられて、世間一般の仕事もできなくて、全て中途半端だったけど、占いと文学が彼を救ってくれた。アキラはポケットに手を突っ込んで小銭をかき集めた。100円玉を取り出して缶コーヒを買った。そしてまた座り込んでタバコに火をつけた。

愛なんて幻想だ。そんなファンタジーの世界は好きじゃない。人間はもっと泥臭い生き物だ。どんなに知識武装したっていずれはボケて全て忘れる。

だったら、人間はなんのために生きている。遊ぶために生きているとお釈迦様が言っている。さあ、笑えよ。哀れな俺を見て汚い生き物だと陰であざ笑っているよ。

嫌いなんだよ。そういう奴。自分じゃ何もできない癖に、新しいことにチャレンジしている姿を陰で笑うだけの奴。人の悪口ばかり言ってさ。成功したら今度は怒りだす。なんなんだよお前。生きてる価値なんてねえよ。兄貴の代わりにお前が死にゃ良かったのに。

アキラはますます酔っぱらっていた。国際通りの入り口で車のヘッドライトはアキラを映しだしては一瞬で走り抜けていく。そのお陰で、少し正気に戻った。

アキラは元宮との数奇な運命に考えを巡らせていた。誕生日が一日違いの幼馴染。同じB型。同じマンション。出席番号も一つ違い。

離れてみて解った。俺も元宮も仏法から逃げられやしない。それが幸せな人生なのかも解らない。けど、あいつは若くして成功した。疑う余地なんてあるわけないだろう。でも、俺はこんな社会不適合みたいに、生き恥を晒しながら、大した結果も出せずに地元でくすぶっている。蒲田に帰ってえ。今すぐ蒲田の汚い空気に触れてえ。5000ダウンロードがなんだよ。所詮インディーズ作家じゃないかよ。人と比べたって無駄だっていうけど、元宮、ここまで追いかけてきたんだよ、お前を。21歳の誓いから40過ぎるまで死ぬ思いでひとり。

アキラの想いは祈りとなって元宮に届くのだろうか。それは誰にも解らない。ただ、地上と天を結ぶこの光だけが知っているように思えるのである。

ぼろぼろに汚れたアキラは、部屋に戻ると涼子にシャワーを浴びさせてくれと言って、おもむろに服を脱ぎ捨てて、風呂場に向かった。涼子はアキラの豹変ぶりにはさほど驚かなかった。

冷水が流れるシャワーを頭から浴びて、うつむいている間、なぜだか解らないが先ほどのことを思い出して、泣きそうになった。しかし、どんなに悲しくても涙は流せない。アキラの涙はとっくの昔に枯れ果てたのだった。

顔をごしごと洗い、ボディタオルに石鹸をこすりつけ思い切り泡立ててから、身体の隅々の汚れを洗う。夏のシャワーはまるでオアシスだ。砂漠の旅の途中で喉がカラカラになった時に見つけたオアシスは、この世のどんな金銀財宝よりも価値が高いと思う。

水は全てを洗い流してくれる。過去の痛みも過ちも、何もかも。若い頃だったら、風呂もついていないアパートに住んでいたから、じっとしてても汗をかく真夏にもシャワーを浴びれない環境だったのだから、昔に比べりゃ天国だ。

アキラがシャワーを浴び終えナイトウェアに着替えて風呂場から出てくると涼子はいつもと違った様子でうつむき加減にメモ帳を眺めていた。

「アキラ君。見つかったよ。恭子の居場所」

「え？ そんなに早くに？」

「ええ。詳しいことは軽犯罪になっちゃから言えないけど、事情を話したら友達が全面協

力してくれたの」

「それで、どこにいるんですか」

「そんなに遠くない所よ」

「じゃあ沖縄県内に？」

「沖縄だけど、離島にいるみたい」

「もしかして、慶良間諸島じゃないですか？」

「え？ なんて解ったの？」

「占術を覗いて、慶良間諸島が一番可能性が高いなあと」

「占ってそんなことまで解るの？」

「いえ、あくまでも占術はヒントです」

「でも、生きているのか死んでいるのかは解らない」

「それでも、僕たちは見届ける権利があると思います」

「そうね。苦楽を共にした幼馴染ですからね」

「今夜は早く寝ましょう。お相手できなくてごめんね」

「……はい」

アキラは何を期待していたのか、また詩音を裏切ることが望んでいたのだろうかと自分自身の意思の弱さをを恥じた。終戦記念日の翌日のお月様は優しく二人を見守っていた。

## 14

2022年8月17日。那覇国際通りコンフォートホテルにて。快晴。

アキラはスマホに日記を書いた。太陽の光がカーテンの隙間から差し込んでいる。海風を受けてレースカーテンがゆらゆらと揺れている。今日は昨日とは打って変わってメンタルの調子が良いみたいだ。だが、安心してはいけない。恭子と元宮の生存確認ができるまでは何が起きるか解らないからだ。

涼子も早朝の出発に備えて、すでに化粧を終えて椅子に座って読書をしていた。本を読む姿はひと際美しく見えるのは気のせいだろうか。アキラがシャワーを浴び終えて髪の毛を乾かし終わると、さっと着替えていつでも出発できる準備が整った。

朝食は一階のレストランで食べようと涼子が言うので、スマホだけを持ってエレベーターで一階まで降りる。

宿泊客はビジネスマンの姿はほぼない。大抵は、他のホテルが取れなかった観光客ばかりで、女子の三人組という姿もあった。

ビュッフェスタイルの無料朝食で、パンやワッフル温かいスープやサラダなど多彩なメニューが並べられていた。アキラはマンゴーソイのスムージーとクロワッサン、卵料理とサラダを皿に盛りつけた。涼子はホットコーヒーとワッフル、サラダだけでいいという。

「アキラ君。いよいよ運命の日だね」

「ええ。たぶん生きてますよ」

「そうかなあ」

「こんな太陽の恩恵を受けた美しい島で死のうだなんて、普通は思わないですよ」

「でもねえ」

「まあ元宮なら大丈夫です。殺しても死なない奴ですから」

「元宮君の心配なんてしてないよ。私が心配してるのは恭子だけ」

「あ。そうでしたか」

「元宮君は根っから明るいからねえ」

「まあ昔から明るかったですけど意外と繊細ですよ」

「でも、慶良間っても渡嘉敷とか座間味とかあるらしいね」

「僕も良くは解らないんです。でも、座間味じゃないですかね」

「なんで？」

「座間味の方が水の透明度が高くてみんなダイビングしに行きたがるみたいですよ」

「はあダイビングかあ。私も恭子のことがなければリゾート気分ダイビングでもして美しいサンセットを観て、夢心地な気分で東京に帰りたいわ」

「しかし、アーティストって本当に自由人ですよ。帰りの予定も決めずに沖縄来れるなんて」

「それを言ったらアキラ君だって自由人じゃない」

「僕の場合は自由人ですけど貧乏なんで意味ないです」

「言うほど貧乏じゃないと思うけどな」

「貧乏ですよ。服だってユニクロですら高いと思ってますから」

「まあ。アキラ君は心配いらないよ」

「え？」

「もうすぐ大物になる予感がするもの」

「そうなんですか？」

「ええ。女の予感は当たるのよ。詩音だってアキラ君の将来性を見抜いて付き合ってたと思うな」

「まあ将来性だけの男ですから」

「そうやって拗ねると。女って母性本能をくすぐられるのよね」

「まあよく解りませんが、そろそろ行きますか」

アキラが行動を促すと涼子は少しめんどくさそうにコーヒーを飲み干してからスマホを持って立ち上がった。

ホテルを出ると朝の清々しい空気に包まれて南国沖縄の天然の癒しを感じていた。フェリー乗り場がある泊(とまり)港ではタクシーで行くことにした。( )バスやモノレールでも行けるらしいが、いちいち調べてるほどの時間的余裕は二人にはなかった。タクシーは泊港へ向けて出発する。国道58号線をひた走る。アキラは船酔いすることを心配して、風邪薬でも効くのかをネットで調べた。どうやら、正確な情報は出てこないが、酔い止めと風邪薬は成分が重なるため併用しないで下さいと記述されている。ということはいつも飲んでいる風邪薬でもある程度効果はあるかもしれない。アキラは母親から貰った黒いカバンから風邪薬を取り出してペットボトルで流し込んだ。

涼子にも勧めたが、乗り物酔いはたぶんしないとのことだった。きっと音楽家からしたら、自分の音にでも酔うことがあるだろうから三半規管が強いのもかもしれないとアキラは思った。

泊港へ着くと緑色の折版屋根の建物内でチケットを購入した。待合所には自動販売機が2台ある。コロナの緊急事態宣言中には考えられなかったが、こうして沖縄旅を満喫できるまでに日常生活は平穏無事に戻りつつあるのを感じていた。

一国の首相経験者が卑劣極まりない凶弾に倒れるなどの痛ましい事件が起こり、ニュースでも連日報道された。一気にカルト宗教と政治の闇がクローズアップされ、関係のない宗教団体への風当たりもだいぶ強くなった。

占星術的に解釈するのであれば、2023年に冥王星がみずがめ座入りすることで時代の流れが一気に変わるのであろうと予測されていた。その前触れには、歴史に残るような事件が起きてもおかしくない雰囲気はあった。すでに、コロナウイルスの蔓延がされに当たる。非公式ではあるがアキラも占術師として、2015年時点で近い未来に疫病が

流行りリモートワークが主流になると予測していた。それを一般公開するほどの勇氣はアキラにはなかったし、その予言はできれば外れて欲しいと願っていた。

だから、こうして涼子と沖縄旅ができているのも、元宮に感謝しなければならない。ピンチはチャンスとって、良いことが起きる前には必ずピンチが訪れるという宇宙の法則があるのだ。この法則は誰にも変えられない。占術も宇宙のルールに則ってできたものだから、仏法や他の宗教とも当然親和性があるのだ。

アキラは時計を見る。時刻は8時50分を指している。そろそろフェリーに乗り込んで出発する時刻だ。

アキラは母親が沖縄出身だが、離島には今回初めて行く。当然フェリーもはじめての経験だ。座間味島まではフェリーだと約2時間かかる。しかも途中で隣の阿(あ)嘉島(かじま)に寄港する。高速船だとまず座間味まで行って阿嘉島に寄港するらしい。その場合は50分でいけるが、みんな早く座間味に到着したいと考えるだろうから予約でもしないとチケットがなかなか取れない。

フェリーには初めて乗船したが、横になれるベッドがあったり、座席もゆったりしているし、デッキに出れば青空と海のコントラストを眺めながら海風に吹かれると最高に気持ちが良い。

アキラは先ほど飲んだ風邪薬が効いたのか、全く酔う気配がなかったので、しばらくはデッキにいて波乗りを楽しむ様に風と一体化して遊んでいた。

すると、徐々に気分が悪くなってきて、気が付いた時にはデッキの手すりにつかまって、やばいと感じ始めていた。

その時、アキラの背後から女性の声が聞こえて、振り返ろうとした反動で、転倒してしまった。どうにか大の字に身体を向けるアキラに、先ほどの声の主が「大丈夫ですか？」と話しかけてきたのである。

女性は麦藁帽子を被っていてさらにサングラスをしてマスクもしているから若いのか年よりなのかも良く検討もつかないが、声の透明感からして、アキラよりは年下だろうと思った。

「すみません。調子こいてデッキで遊んでたら急に頭が痛くなってしまって」

「今、冷たいお水買って来ますからここで少し寝ていて下さい」

いったいなぜこんな自分に親切にしてくれるのかは解らないが、冷たい水はありがたい。酒に追っ払った時も大抵は冷たい水を飲めば復活すると信じている。

先ほどの女性が帰ってくるまでの間、調子をこいてデッキで風になっていた自分を思い出して笑いがこみ上げてきた。タイタニックじゃあるまいし、映画みたいにロマンチックには生きられないようだ。たぶん、マジカルカラー緑だから、格好つけようなんて思わない方が身のためだ。

「あのお。お水買ってきました。起き上がれますか？」

麦藁帽子の女性が介抱してくれて、ようやく起き上がることができた。しかも、幸運なことに介抱して貰うとき麦藁の女性の胸が頭に当たっていた。かなりの巨乳だ。

アキラがニヤニヤしていると奥の方から涼子が歩いてきた。今日はなんて幸運な一日なんだ。両手に花。しかも巨乳が二人。ムフフ。アキラは完全に性の奴隷と成り下がっていた。

「ちょっと。人の彼氏にちょっかい出さないでよ」

涼子が麦藁の女性に文句を言う。麦藁の女性は一瞬むっとしていた。

「ん？」

涼子は麦藁の女性のことを不審に思い、下から上まで舐めまわすように見ている。

「詩音？ こんなところで何してんの？」

涼子が麦藁の女性に言う。続けて涼子は麦藁の女性が来ていた季節外れのオーバーオールを剥いで、麦藁の帽子ももぎ取った。

「な、なにするんですにゃ」

紺色のワンピースに星のモチーフが入ったジーンズが見えた。そして、髪の毛はショートヘアになっているが、前髪がぐるりと巻いてあって、星崎詩音のようにも見えた。

「何するんですにゃ。じゃないでしょーに」

涼はいじめっ子のようにサングラスとマスクも剥いでみせた。

「ちょっと先輩。酷いじゃないですか？」

アキラはその姿を見て顔面蒼白になった。麦藁の女性は詩音だったのだ。

「はああ。全く。沖縄まで追いかけてくるなんてルール違反も甚だしいわ」

「詩音。なんでここが解ったの？」

アキラは体育座りしながら詩音に尋ねる。

「なんでじゃないでしょ。浮気者。スケベ。変態。アキラなんか大嫌い」

詩音はむきーとした感情をあらわにして腕をぶんぶん振っている。

「そんなこと言ってる場合じゃないって。マジでゲロ吐きそうなんだから優しくしてくれって」

アキラはホントは酔いが覚めていた。詩音が買ってきてくれた水のお陰かもしれない。

「ちょっと。おままごとなら東京帰ってからやってよ。私の親友が大変な時期だっているのに」

涼子はふてくされながら言うと、詩音はお腹を抱えてゲラゲラと笑い出した。

「涼子先輩ってもっとクールな人かと思ってました」

「何よ。親友の心配して何が悪いの？」

「そうやって人の彼氏奪うのもうやめたらどうですか？」

「人間きの悪いこと言わないでよ。いつどこで誰が他人の彼氏を奪ったっていうのよ」

「元宮さん？ でしたっけ？ アキラの幼馴染の」

「元宮君と私は関係ないでしょ」

「あれえ。おかしいな。五反田のホテルから出てくるところ見た人がいるんですけどねえ」

「冗談言わないでよ。黙って聞いてればすぐにヤラせる女みたいに言いやがって」

「ほら。本性出てきた。その調子ですよ先輩。元宮君だってその勢いで押し倒せば彼氏になってくれますって」

「詩音。いい加減にしな。アキラ君の浮気すら許せなかったくせに、今更出てきてアキラ君とより戻そうたって、虫が良すぎるじゃない」

「別にアキラとは寄りを戻したいなんて思ってません」

「じゃあなんで邪魔するのよ」

「先輩。何か勘違いしてますよ」



「誰がどう聞いても邪魔してるじゃない」

「そもそもアキラと私は別れてなんかいません」

「え？」

「アキラが浮気者なのは事実です。けれど、私は絶対浮気や不倫はしません。アキラ一筋です」

「それは詩音の一方的な願いでしょ。アキラ君だって私の方がいいに決まってる」

「先輩はまた勘違いしてます。アキラは浮気性なのは7年も付き合ってきて今回はじめてしりました。たぶん先輩とだって寝たかもしれない」

「かもしれないっていうより、彼は素晴らしかったわ」

「そうでしょうね。それも私が一番よく知っています。それでも、いいんです、だってアキラは小説家志望ですもの。それすらも芸の肥やしと思っています」

「はあ。やっつけられないわ。あなたアキラ君が初めての男性だったんですってね」

「はい。何か問題ありますか？」

「ちょっと若いからって調子に乗らないでよ」

「若いけどお金も持ってますよ」

詩音と涼子の意地の張り合いは聞いていて気持ちの良いものではなかった。しかし、もととえば、彼女たちの喧嘩の理由を作ってしまったのは自分自身だ。どうにか元宮と恭子さんの無事が確認できるまで、穏便にことが進まないだろうか。

詩音と涼子は口喧嘩に疲れはてて、何も言わないまま時は流れていった。慶良間の海は世界でも有数の水の透明度を誇っているらしい。その綺麗な海がこうして一人の男の奪い合いというしょうもない理由で穢されていくのはとても悲しいことだ。

座っていて気が付かなかったが、さっきから涼子の様子がおかしい。

「涼子さん。顔色が悪いですけど大丈夫ですか？」

アキラは涼子の背中に手を添えて話しかけると

「触らないで」

とって激しく拒否された。しかし、その瞬間に涼子はアキラの胸に寄り掛かるように倒れ込んでしまった。

「涼子さん！」

「先輩！」

アキラと詩音の声は一つの布を織りなすようにハーモニーを奏で慶良間の海の彼方へと鳴り響いていった。

## 15

アキラと詩音は座間味の小さな病院にいた。涼子がフェリーで体調を崩し緊急搬送されたことを詩音は自分のせいだとアキラに漏らしていた。

涼子が横たわっている病室の傍で、二人は意識が戻ることを祈っていた。

「アキラここは私一人でもいいから、元宮君と彼女さんを探しに行ったら？」

「そんな訳にはいかない。目の前の一人を大切にできなくて悩める友人を救えるわけじゃない」

アキラは自分が犯した罪を激しく後悔していた。単なる性欲のはけ口に風俗に行ったことがこんなにも詩音を傷つけていたなんて知らなかった。

「しかし、どうして僕の居場所が解ったの？」

「アキラ。そんなことはどうでもいいじゃない」

アキラは詩音の頭の良さを嫌というほど知っている。自分たちだって、半ば犯罪すれすれの方法で恭子の居場所を特定したのだから、詩音だって同じ手を使ったかもしれない。

「詩音ちゃん涼子さんのことは僕がみてるからちょっとお茶でも飲んできたら？」

「ありがとう。でも、のど渴いてないんだよね。アキラの方こそ水分摂ってきた方がいいよ。タバコも吸いたいだろうし」

「こんな時にタバコなんて気が引ける。いっそ禁煙しようかな」

「アキラは禁煙は無理だよ。だってニコチン依存症だもの。遠慮せずにタバコ吸ってきて。ついでに外の美味しい空気もね」

「じゃあ一本だけ」

アキラは15歳からタバコを吸っているアウトロー作家だ。一般的にはタバコとお酒は20歳からという決まりがあるが、昔はタバコの自動販売機などで未成年でも簡単にタバコを入手することができた。ゆえに、アラフォー世代よりも上の世代までは、未だに喫煙率が高いのだと思っている。

アキラは缶のカフェラテを片手に持ち病院の廊下を歩いていく。外まで出ると誰にも気づかれなような場所を探し出し、ポケットから煙草と携帯灰皿を取り出して一服していた。すると、アキラの右側から色黒の男性が近寄ってきて

「すみませんライター貸してもらってもいいですか？」

と言った。ハスキーボイスのその声はどこかで聞いたことがある懐かしい響きだった。ライターを男性に渡し、「ありがとうございます」と言って、マスクを外した時にアキラは気づいた。

「勇気？」

勇気とは元宮のファーストネームである。色黒で短髪、青いサーフTシャツに短パン。間違いなく地元でも良く見かけていた元宮勇気だった。

「はっちゃん？」

「勇気。良かった。ずっと探してたんだよ」

「え？ なんで？ なんか用事あったら連絡くれれば良かったのに」

「地元では勇気が失踪したって噂になってて、ママさんも心配してたぞ」

「俺が失踪？ ないない。太陽が西から昇ろうともあり得ないって」

「じゃあ、なんで探さないで下さいなんて置手紙残して突然消えたんだ？」

「それにはここでは話せない深いわけがあるんだよ」

「悪いけど、ママさんから行方が解ったら連絡してくれって頼まれて、部屋の様子も見に行っただぞ」

「おいおい。そんな大げさな。いちおう地元では有名なスターじゃん？ 放っておいて欲しいときくらい普通にあるって」

「そんなことよりも、写真に写ってた涼子さんと一緒に来てるぞ」

「涼子さんか。じゃあ恭子のこと以来来たのかな？」

「二人の間に何があったのかは聞かされてないし、聞いてもないけど……………」

そこまで言うと元宮は急に元気がなくなって、もう一本タバコ吸おうぜと言ってライターをねだった。

「恭子さん。涼子さんの話だと失踪したって聞いたけど無事なのか？」

「恭子は生きているよ。俺の心の中で永遠にな」

アキラは沈黙した。それ以上何も言えなかった。涼子さんになんて伝えればよいのか。

「まあ元気そうで何よりだ。地元にはいつ帰ってくるんだ？」

「恭子の魂が浄化されるまではここにしようと思っている」

「……………助からなかったか」

「癌だったんだよ。余命も宣告されていてな。なかなか忙しくて病院のお見舞いに行くことすら難しい状況だったから、悔しくてな。最後は海が観たいっていうから、二人の思い出の土地を回って最後にたどり着いたのが座間味村だったんだ」

「まあこんな慰めにもならないけど、最後を看取れたのは幸運だったな」

「ああ。俺の人生の中で、最も幸福な時間だった。どんな大きなステージでライブしようとも、アルバムが数百万枚売れようとも、恭子と過ごした日々には比べたら過去の栄光だよ」

「生老病死。人は生まれて老いて病で倒れて亡くなっていく」

「そう。誰しもが逃れられない運命だ」

「今、恭子さんは病院に？」

「いや、単純に俺の喉の調子が悪いから病院に来ただけだ。タバコか酒のどちらかを辞めないと良くならないらしいけど、定期的に病院通っておけばだいぶ楽だからな」

タバコを吸いきると神が計らったかのようなタイミングで詩音呼びに来た

「アキラ。涼子さん意識戻ったよ」

病院の表口から詩音は嬉しそうな声をあげてアキラにいう。アキラは詩音に手を振っ

て応える。そして元宮に事情を説明することにした。

「涼子さんさ。恭子さんが自殺するかもって心配ではるばる沖縄の座間味まで追いかけてきたんだ。挨拶してもらってもいいか？」

「何言ってんだよ。アキラよりも俺の方が付き合い長いんだぞ。当然だろ」

元宮は携灰皿にタバコの灰を落としながらいう。

「詩音。もうちょっとしたら行くから病室で待ってて」

アキラがそう言うと詩音は遠目から元宮に軽く会釈して早々に病室へと戻っていった。

「さて。涼子さんになんて説明すれば良いかなあ」

「またお前。二人の女を又にかけているのか？」

「違うよ。そもそも涼子さんとは出会ってまだ数日しか経っていない」

「それで、どっちが本命なんだ？」

「そういう小学校の頃のような話辞めようぜ。どっちが本命とかないよ」

「モテる男は辛いな」

「勇気の方がモテるだろうに」

「ま。俺は来世でも恭子一筋だけだな」

元宮がそう言うと、座間味村に爽やかな風が吹き抜けていった。占術からヒントを得て元宮と片瀬恭子を探す旅は、少し心に棘を残す苦い物語になった。しかし、占術は古来天体の動きを観測していたことから始まった長い歴史がある。救える命と救えなかった命。そのどちらもかけがえない大切な命であることには変わりはない。

ふと元宮が空を仰ぐように両手を合わせた。アキラはそれを見て安心した。この世から悲惨の二文字をなくしたい。これからも、音楽家と小説家として、その夢を叶える為、日々、前進していただけたとアキラは決意した。きっと元宮だって同じ気持ちだ。

沖縄の空は、太陽や雲との距離が近くて、今にでも大切な人達に会いに行けそうだと感じた。じんわりと元宮の額から汗が流れている。色黒の彼の肌はとても健康的で、心配していたのが馬鹿らしく感じている。さあ、まだまだ人生これからが本番だ。

元宮とアキラは久しぶりに二人きりで手を合わせて題目を唱えた。天国にいるであろう恭子の魂に向け真心からの祈りを捧げた。



---

十六夜の占術師

---

著 橋本 昂祈

制作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---